

項目別の状況

大学の教育研究等の質の向上
1 教育に関する目標
(1) 教育の成果に関する目標

中期目標	<p>北海道大学における教育は、その基本理念に基づき、高い倫理性を持って未踏の領域を開拓し、変化する社会に柔軟に対応し、実社会に専門的能力を生かし、世界の第一線で活躍できる人材の育成を目標とする。</p> <p>この目標を達成するに当たり、研究主導型大学である北海道大学には、何よりもまず国際競争に耐えうる高い水準の大学院課程が求められるが、同時に、北海道における唯一の国立総合大学としてのユニークな地位と教育的伝統を持つ優れた学士課程を、今後とも維持し発展させていかなければならない。そのために、学士課程と大学院課程における各々の教育の特質と目標を明らかにし、充実した教育課程の展開と不断の改善を目指す。</p> <p>() 学士課程</p> <p>学士課程においては、市民としての自覚を持って社会に参加すること、専門の基礎となる学問やコミュニケーションの方法を身に付けること、特定の専門分野を広い視野のもとに学ぶこと、を目指した教育を通じて、国際的に通用する高度な学問的素養を持ち、健全な市民としての確かな判断力とリーダーシップを発揮できる人材を育成するとともに、専門職業人として指導的立場に立ちうる人材の育成を目指す。</p> <p>() 大学院課程</p> <p>大学院課程においては、研究主導型大学として世界的水準の研究を担うことのできる卓越した研究者を育成するとともに、基幹大学として社会に貢献しうる高度専門職業人の育成を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学士課程においては、専攻分野における高度の知識や学芸を身に付けさせ、研究に参画する基盤的能力を持った人材を育成するとともに、社会に必要とされる高度な専門的能力を身に付けさせ、国際的にも活躍できる高度専門職業人を育成することを目標とする。 ・ 博士(後期)課程においては、専攻分野における高度で、かつ最先端の知識や学芸を身に付けさせ、独立して研究を展開し、世界的水準の研究を担うことができる人材を育成するとともに、専門的職業能力の一層の高度化を目標とする。
------	--

中期計画	年度計画	計画の進行状況等
<p>全学教育の成果に関する具体的目標の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本学では、教養教育(教養科目)に専門基礎教育(基礎科目)を加えて、全学の責任の下に全学の教員が授業を担当する「北大方式」という特徴ある教育を、以下のとおり「全学教育」として実施する。 ア) 本学では、教養教育をすべての学部教育にとって不可欠のコアと位置づけ、「コアカリキュラム」と称する。このように教養教育を重視する教育理念に従って、「最良の専門家による最良の非専門教育」を実施し、豊かな人間性が高い知性、並びに広い教養、すなわち、人間の生とそれをとりまく社会や自然に対する広い視野と高い視点、そして深い洞察を統合する力を身に付けさせるとともに、高いコミュニケーション能力や情報リテラシー能力などの基盤的能力、並びに異文化理解能力の育成を図ることを目指す。 イ) 専門基礎教育(基礎科目)は、数学、物理学、化学、生物学及び地学の基礎的学問分野の学力を、全学教育の段階で専門教育に必要なレベルに到達させることを目指す。 	<p>全学教育の成果に関する具体的目標の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本学では、教養教育(教養科目)に専門基礎教育(基礎科目)を加えて、全学の責任の下に全学の教員が授業を担当する「北大方式」という特徴ある教育を、以下のとおり「全学教育」として実施する。 ア) 本学では、教養教育をすべての学部教育にとって不可欠のコアと位置づけ、「コアカリキュラム」と称する。このように教養教育を重視する教育理念に従って、「最良の専門家による最良の非専門教育」を実施し、豊かな人間性が高い知性、並びに広い教養、すなわち、人間の生とそれをとりまく社会や自然に対する広い視野と高い視点、そして深い洞察を統合する力を身に付けさせるとともに、高いコミュニケーション能力や情報リテラシー能力などの基盤的能力、並びに異文化理解能力の育成を図ることを目指す。 イ) 専門基礎教育(基礎科目)は、数学、物理学、化学、生物学及び地学の基礎的学問分野の学力を、全学教育の段階で専門教育に必要なレベルに到達させることを目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全学教育科目は、すべての専門教育にとって不可欠であるという意味で「コアカリキュラム」と位置付けた「教養科目」と、各学部の専門教育の基礎となる「基礎科目」から成り立つ。 ・ 高等教育機能開発総合センター長を委員長とし各学部等の代表で組織された全学教育委員会における具体的な実施方法の検討の結果、26部局、1,412名により1,655コマ(週2時間で15週を1コマとする)が全学教育において開講された。その成果に基づく教育プロジェクトは、実績ある教育改革の取組として文部科学省が公募した平成15年度特色ある大学教育支援プログラム(至平成18年度)に選定されている。 ・ 「教養科目」は、一般教育演習(1クラス当たりの履修者数を20人以下に限定した双方向型の授業)、分野別科目(学問分野に基づいた必須の教養科目であり「思索と言語」「歴史の視座」「芸術と文学」「社会の認識」「科学・技術の世界」から構成される)、複合科目(複数の学問分野の教員が特定のテーマのもとにトピックスを提供する科目であり「環境と人間」「健康と社会」「人間と文化」「特別講義」から構成される)、共通科目(共通性の高い基礎的分野として「体育学」「情報処理」「統計学」「基礎自然科学実験」「心理学実験」などから構成される)、外国語科目(第二、第三の言語として「外国語B」「外国語C」を開講し、英語を含めた2ヶ国語を必修とする)をもって構成し、シラバス等に示された授業計画に則り適切・体系的に配置している。また、情報リテラシー等の設備等については、主に全学教育で利用する高等教育機能開発総合センター及び情報教育館に配置されたパソコン(情報基盤センター管理374台)を平成16年度末に更新し、ハードの面で整備を実施した。異文化理解については、「社会の認識」「一般教育演習」「英語」の中の6科目で異文化の基本的知識を学習する内容を盛り込んで実施した。 ・ 基礎科目として「数学」「物理学」「化学」「生物学」「地学」を開講し、体系的講義と自然科学的基礎実験を通じた授業を展開した。 ・ 平成18年度以降の新教育課程において展開予定の新理科基礎科目について、平成16年度から獣医学部・水産学部と医学部保健学科において先行してパイロット授業(物理学・化学・生物学・地学)を実施した。新理科基礎科目においては、様々なレベルの学生を想定し高等学校での履修の有無に関わらず興味を持って履修・理解できることを目標としており、パイロット授業においては、大講義室での講義(デモ実験含む)と演習室での小グループ演

		<p>習・議論を組み合わせ、e-ラーニングや映像の使用など最新機器を使用して、きめの細かい授業を実現した。また、翌学期再履修クラスを新たに導入して再履修の機会を増やすのみならず、同一学期の並行履修や履修時期をずらすことにより学生のニーズに応じた様々な履修パターンを提供することを可能とした。この結果、講義準備と講義方法、教育効果、教育負担など平成18年度からの本格的実施に役立つ知見を得た。</p>	
<p>学部教育の成果に関する具体的な目標の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> 学部教育では、全学教育で身に付けさせた能力等に加えて、各分野の基礎的知識を確実に習得させるとともに、豊富な専門分野の知識を身に付けさせ、新しい課題に対して積極的に道を拓く人材を育成する。 	<p>学部教育の成果に関する具体的な目標の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> 学部教育では、全学教育で身に付けさせた能力等に加えて、各分野の基礎的知識を確実に習得させるとともに、豊富な専門分野の知識を身に付けさせ、新しい課題に対して積極的に道を拓く人材を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院教育・卒業後の社会的貢献や学士課程全学教育との関連を重視しつつ、少人数教育、双方向型授業の推進、学内外の医療現場での実習の充実(医学部、歯学部)などの授業改革、カリキュラムの再編(文学部、法学部、歯学部)などを実施するとともに、他の学部においても平成17年度以降の学部教育について改革案をまとめる(工学部)などの教育改革に継続的に取り組んでいる。また、教育改革室(後記の1の参照)の下に設置した「平成18年度以降の教育課程検討WG」が平成16年12月提出した最終報告によって平成18年度以降の全学教育カリキュラムの基本設計がなされたことを受けて、教育改革室において平成18年度以降の入学者を対象とする文系基礎科目や理系基礎科目など学部教育との接続の在り方の検討を平成17年1月から開始し、これと並行して各学部における専門教育の在り方の検討を開始した。 	
<ul style="list-style-type: none"> 国家試験にかかわる専門職業人を養成する学部では、専門職業人としての自覚を高めるため、専門導入教育及び実践的教育と結合した教育課程を充実させ、高い合格率を維持するとともに、それぞれの分野において指導的立場に立ちうる人材を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 国家試験にかかわる専門職業人を養成する学部では、専門職業人としての自覚を高めるため、専門導入教育及び実践的教育と結合した教育課程を充実させ、高い合格率を維持するとともに、それぞれの分野において指導的立場に立ちうる人材を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部とも取得しうる資格を学生に示し、取得のためのアドバイスを行うなど努力を行っている。特に学部教育が国家試験資格と直接に結合している医学部、歯学部、薬学部、獣医学部に関しては、専門的職業人となるための独自の教育努力を新しいプログラムの導入などを通じて展開している。医学部では1年次から小グループで市内医療施設での見学実習を実施して医療へのモチベーションを高め、また1、2年次から医療に携わるものに求められる考え方や倫理、習慣と態度などを修得させる授業を展開した。歯学部ではearly clinical exposure, late clinical exposure, 院外実習などのプログラムを開始し、さらに1年次から臨床に関わることのできるカリキュラム導入の検討を開始した。薬学部では1、2年次での薬学概論による啓発、TAを利用した基礎知識習得達成度の向上などを実現した。獣医学部では独自の「学生の授業評価」を実施し、その結果を公表して教育改善を促進するなど努力を払った。このような教育努力の結果、平成17年3月卒業生については、医師国家試験合格率は95.7%、歯科医師国家試験合格率は80.8%、薬剤師国家試験合格率は88.1%、獣医師国家試験合格率は97.5%、総平均90.7%となった。 	
<p>大学院教育の成果に関する具体的な目標の設定</p> <p>修士課程においては、専門科目の履修、各研究室・ゼミ等での研究への参加及び修士論文の指導・審査により、専攻分野及び関連分野において、研究に参画する能力を持つ人材を育成する。併せて社会のニーズに対応した多様なコースの充実を図り、国際的にも活躍できる高度な専門的能力を持つ高度専門職業人を育成する。</p>	<p>大学院教育の成果に関する具体的な目標の設定</p> <p>修士課程においては、専門科目の履修、各研究室・ゼミ等での研究への参加及び修士論文の指導・審査により、専攻分野及び関連分野において、研究に参画する能力を持つ人材を育成する。併せて社会のニーズに対応した多様なコースの充実を図り、国際的にも活躍できる高度な専門的能力を持つ高度専門職業人を育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各研究科においては、従来の特色である少人数でのゼミなどを通じた密度の高い教育と研究指導を維持するとともに、学生や社会のニーズに応じて広い視野を持った高度な専門的知識を有する人材育成を目的として「コース制」を設けることや社会人受入推進を図る長期履修制度を導入することなど高度専門職業人の指導体制の充実を図った。研究者育成に関しては、修士論文等の研究成果を国内及び国際学会に積極的に参加発表させることにより研究機関・民間の技術者との交流を通じた学生自身の研究意識の向上にも努めた。また、既存の研究科の学問領域を超えた新しい大学院教育プログラムとして平成12年度から実施している大学院共通授業科目は、年々開講科目の充実が図られ、平成16年度には12分野で35科目を開講した。また、履修学生も平成16年度には1,568名を数え、著しい増加の傾向を示し、学際的な有意な人材育成に貢献している。これらの結果、1,473名の修了者のうち、332名が博士後期課程、943名が専門的・技術的職業などに就職した。 	
<ul style="list-style-type: none"> 博士(後期)課程においては、独自のテーマに基づく研究を自立的に遂行するよう指導し、専攻分野及び関連分野において、独立して世界的水準の研究を展開できる人材を育成するとともに、高度に専門的な業務に従事する人材を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 博士(後期)課程においては、独自のテーマに基づく研究を自立的に遂行するよう指導し、専攻分野及び関連分野において、独立して世界的水準の研究を展開できる人材を育成するとともに、高度に専門的な業務に従事する人材を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院学生の論文掲載機会の充実をめざす論文集刊行体制の改善(文学)、研究指導水準の向上のための副指導教員体制の採用(経済学)、COEプログラムへのRA、PD採用やワークショップへの学生の組み込みによる先端研究への参画を通じた研究指導体制の向上(理学、地球環境科学、情報科学)、国際学会への参加と外国雑誌への投稿の促進(医学、薬学、工学)など、それぞれの研究科において研究指導の高度化、先端的研究レベルでの研究奨励と支援などを行い、博士学位授与者の拡大を図る諸施策を実施した。 	
<p>卒業後の進路等に関する具体的な目標の設定</p> <p>() 学士課程</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎・専門教育及び研究経験により得られた広い視野と知見を最大限に生かし、産業界、官公庁、公益的組織及び専門的職業において指導的役割を担うことを志す者については、本学又は他大学の大学院に進学すること 	<p>卒業後の進路等に関する具体的な目標の設定</p> <p>() 学士課程</p> <ul style="list-style-type: none"> 学士課程では、基礎・専門教育及び研究経験により得られた広い視野と知見を最大限に生かし、産業界、官公庁、公益的組織及び専門的職業において指導的役割を担うこと、研究者あるいは専門職業人を志す者については、本学又は他大学の大学院 	<ul style="list-style-type: none"> 産業界、官公庁、公益的組織及び専門的職業において指導的役割を担うためには、適切な職業を選択して就職する必要がある。そのための情報提供やガイダンス、セミナーの開催及び相談体制の充実を図った。また、学部教育の中で少人数教育などを通じて、研究者あるいは高度専門職業人を志す者の育成に努め、大学院修士課程及び博士課程への進学者を拡大するガイダンスなども実施し、日常的指導や特に優れた学生を対象とする特別選抜制度などを導入した。この結果、2,245名の卒業者のうち、大学院に1,214名が進学し、医師・歯科医師・獣医師として118名、薬剤師として9名をはじめ科学研究者・技術者・事務従事者等として612名が就職した。 	

<p>を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> 国家試験に係る専門的職業人を養成する学部では、取得した資格を生かして、それぞれの専門分野で指導的な立場で活躍し、社会、地域のために貢献するとともに、より高度の教育を目指して大学院に進学することも目標とする。 	<p>に進学することを目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> 国家試験に係る専門的職業人を養成する学部では、取得した資格を生かして、それぞれの専門分野で指導的な立場で活躍し、社会、地域のために貢献するとともに、より高度の教育を目指して大学院に進学することも目標とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 生命系の国家試験に係る専門的職業人を養成する学部は、いずれも技術のみでなく、社会的、倫理的見地を含めて専門的職業人を育成する教育を進めるとともに、先端的研究分野への進学を促進している。医学部では卒業生93名のうち89名が医師国家試験に合格（その他既卒4）し、87名が臨床研修医となり医療現場での研修に向かい、本学大学院に1名が進学した。歯学部では、52名の卒業者のうち42名が国家試験に合格（その他既卒3）し、38名が臨床研修や医療現場に向かい、12名が大学院に進学した。薬学部では、86名の卒業生（16.9月卒業生1名を含む）のうち85名が薬剤師国家試験を受験し、合格者は75名（その他既卒2）であり、60名は大学院に進学した。獣医学部では、卒業生40名のうち39名が獣医師国家試験（その他既卒1）に合格し、12名が獣医療現場に向かい、9名が大学院に進学した。 	
<p>()大学院課程</p> <ul style="list-style-type: none"> 修士課程では、専攻分野において修得した高度の知識や研究能力を最大限に生かすべく、本学又は国内外の他大学の博士(後期)課程への進学はもとより、研究、教育機関や企業等の研究開発部門への就職を目指す。また、高度専門職業人養成を行う分野の修士課程修了者は、社会のニーズに対応した高度に専門的な業務を目標とする。 博士(後期)課程では、専攻分野において修得した高度、かつ最先端の知識と研究能力を最大限に生かすべく、国内外における大学等の高等教育機関の教育職並びに各分野の研究開発部門に就職することを目標とする。また、社会の変化に応じて多様化すると思われる高度に専門的な業務をも視野に入れる。 	<p>()大学院課程</p> <ul style="list-style-type: none"> 修士課程では、専攻分野において修得した高度の知識や研究能力を最大限に生かすべく、本学又は国内外の他大学の博士(後期)課程への進学はもとより、研究、教育機関や企業等の研究開発部門への就職を目指す。また、高度専門職業人養成を行う分野の修士課程修了者は、社会のニーズに対応した高度に専門的な業務を目標とする。 博士(後期)課程では、専攻分野において修得した高度、かつ最先端の知識と研究能力を最大限に生かすべく、国内外における大学等の高等教育機関の教育職並びに各分野の研究開発部門に就職することを目標とする。また、社会の変化に応じて多様化すると思われる高度に専門的な業務をも視野に入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 修士課程は高度専門職業人育成と研究者育成の両面を有し、修士課程修了者1,473名のうち955名が科学研究者(62名)、機械・電気技術者(187名)、建築・土木測量技術者(87名)、情報処理技術者(119名)、薬剤師(18名)、専門に関連する事務・販売・サービス従事者(131名)、その他の専門的・技術的職業に就職し、大学院に332名が進学した。 博士(後期)課程の修了者507名のうち、東北大学大学院助教授、トルコDokuz Eylul大学助教授、ウズベキスタンTashkent大学講師(以上、経済学研究科)、北海道大学助教授、札幌国際大学助教授(以上、医学研究科)、金沢工業大学講師(文学研究科)、北海道大学助手など大学の研究職41名が、国立がんセンター、国立衛生研究所、理化学研究所その他の諸機関及び種々の大学のポスドク研究員など科学研究者54名を含んで、研究・教育者並びに医師を含む専門的・技術的職業従事者として228名が就職した。その他に本学助手あるいはポスドク研究員、大学院研究生等を経て、大学教員、研究機関研究員となった者が多数いる。 	
<p>教育の成果・効果の検証に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 単位修得状況、進級状況、学位取得状況及び資格取得状況などについて点検評価を行い、その向上に努める。 	<p>教育の成果・効果の検証に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 単位修得状況、進級状況、学位取得状況及び資格取得状況などについて、点検評価を行う体制の基盤を整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成7年度入学者から学籍管理、証明書発行、カリキュラム管理、履修管理、成績管理、修学指導、奨学厚生関係を包括する教務情報システムを運用してきたが、平成17年度からのGPA制度の導入、同18年度からのWeb履修登録の導入、同19年度以降のシラバス入力システムの変更、学生証のICカード化、修学支援システムの拡張などを展望して、平成15年度から新教務情報システム導入の検討を開始し、平成16年度には検討を終了してシステムの入札などを実施し、平成17年4月からの新システム稼働の準備を整えた。また、学位や資格取得に関連した学部専門教育・大学院教育の情報を全学において集約し、必要な改革の方向を教育改革室の検討グループにおいて検討し、平成17年度からは教育改革室にWGを設置し、具体的な検討を開始することとした。 	
<ul style="list-style-type: none"> 卒業(修了)後の進路及び就職後の状況等を調査するためのネットワークを、同窓会組織等と連携して整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> 卒業(修了)後の進路及び就職後の状況等を調査するためのネットワークの整備について、同窓会組織等と連携しつつ検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部同窓会及び地区同窓会が連携して北海道大学を支援し、また学生の就職支援などを行うために平成16年4月14日に北海道大学連合同窓会が結成された。キャリアセンターにおいては同連合同窓会と連携して、就職後の卒業(修了)生の状況を調査するためのネットワーク整備の方策並びに手法にかかる検討に着手した。 	

大学の教育研究等の質の向上
 1 教育に関する目標
 (2) 教育内容等に関する目標

中期目標	<p>アドミッション・ポリシーに関する基本方針</p> <ul style="list-style-type: none"> 北海道大学は、毎年すべての都道府県から入学を受け入れている全国型の大学である。このことが、異なる地域的・文化的背景を持つ者同士の切磋琢磨を可能にし、望ましい教育的環境を作り出している。本学は、創立以来この伝統を今後とも維持・発展させ、全国各地のみならず、広く世界に人材を求め、 北海道大学の教育目標に基づいた人材育成を行うため、学士課程教育を受けるにふさわしい学力を備えるとともに、向学心・創造力・倫理性に富み、論理的思考力とリーダーシップを持つ学生を受け入れることを目指し、諸種の資質と能力をはかる多様な選抜制度を通じて入学を選抜する。 大学院課程においては、北海道大学及び各研究科の教育目標を、研究者及び専門職業人として、より高度に達成することを目指し、これに適した能力、資質、適性、個性、意欲を持ち、深い進学動機を有する学部卒業生、留学生、社会人を多面的に選抜する。 各種のメディアを活用した積極的な広報活動を通じ、これらのアドミッション・ポリシーを入学志望者・関係者に公表周知する。 <p>教育課程に関する基本方針</p> <ul style="list-style-type: none"> 北海道大学の教育に関する目標を達成するため、充実した教育課程の編成に努め、創造的かつ体系的な教育内容を提供する。 全学教育においては、コアカリキュラムの精神に則り、バランスの取れた教育課程の編成に努める。 学部教育においては、学部専門科目の充実を図るとともに、教養科目及び基礎科目との接続を深め、体系的な学部一貫教育の実施に努める。 大学院教育においては、広い視野を持った、世界水準の研究能力を養成するため、共通授業等により研究科を超えた教育・研究面での連携を図ることを含め、指導体制の一層の充実に努める。併せて、高度専門職業人育成のための教育課程の充実に努める。 <p>教育方法に関する基本方針</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学部・研究科における教育課程やそれぞれの授業の特性に適合した授業形態及び学習指導方法等を実施することを基本方針とする。 授業方法の多様化により教育効果の向上を目指し、授業内容の改善を図るとともに、特に学生参加・少人数・体験型授業や、多様な社会経験・実地研修等の機会の拡充を図る。 <p>成績評価に関する基本方針</p> <p>適切な成績評価は教育効果を上げるために不可欠であるとの認識に立ち、教員による厳格かつ公正な成績評価を行い、評価基準と成績分布を適切に公表することによって実効的な単位制を確立する。</p>
------	---

中期計画	年度計画	計画の進行状況等	
<p>アドミッション・ポリシーに応じた入学選抜を実現するための具体的方策</p> <p>() 学士課程</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成16年度入学から、本学の教育を受けるにふさわしい学力を備えた学生を選抜するため、大学入試センター試験で5教科・7科目を課す制度を導入する。 	<p>アドミッション・ポリシーに応じた入学選抜を実現するための具体的方策</p> <p>() 学士課程</p> <ul style="list-style-type: none"> 本学の教育を受けるにふさわしい学力を備えた学部学生を選抜するため、大学入試センター試験において5教科・7科目を課す入学選抜制度を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年度入学選抜から、大学入試センター試験の受験を要する教科・科目を文系学部にとっては6教科7科目(地歴から1科目、公民のうち倫理・政治経済から1科目選択)、理系学部にとっては5教科7科目(地歴と公民から1科目選択)とした。 	
<ul style="list-style-type: none"> 平成18年度入学から、平成12年大学審議会答申、平成11年告示の高等学校学習指導要領に対応する入学試験制度改革を、前期日程試験、後期日程試験、AO入試それぞれの見直しを通じて実現する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成18年度学部入学からの平成12年大学審議会答申、平成11年告示の高等学校学習指導要領に対応する入学試験制度改革について、前期日程試験、後期日程試験、AO入試それぞれの見直しを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成18年度以降の学部入試については、平成15年12月に他大学に先行して基本的方針の決定の上で外部への公表を行ったが(本学ホームページへの掲載を含む)、平成16年12月にその具体化としての「理学部及び工学部の募集単位の変更、第1段階選抜の倍率、旧教育課程履修者に対する経過措置、新たに大学入試センター試験を課すAO入試(工学部、農学部の一部)の方針、AO入試を新たに導入する帰国子女特別選抜について決定し外部に公表した。さらに、基本方針策定以来検討してきた「北海道大学のアドミッション・ポリシー(教育理念と教育目標、求める学生像、募集単位や選抜方法の意図などから構成)」を他大学にさきがけて平成16年12月に公表した。 また、大学審議会答申と国大協の入試改革に対応して、平成16年4月に教育改革室の下に「入学選抜の現状と今後の対応に関するタスク・フォース」を設置し、入試改革の諸課題の論点整理を進めるとともに、平成7年度から平成16年度の学部縦割り入試の検証と募集単位の「大きくくり」に関する調査分析を実施し、さらに平成17年度に再編・設置する「アドミッション・センター」の課題となる平成20年度以降の入学選抜制度改革の論点を整理した。 	
<ul style="list-style-type: none"> 多様な学生を受け入れるため、2年次及び3年次編入学制度を拡充するとともに、帰国子女特別選抜については、平成16年度入学からその対象を永住権保有者に拡大する。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様な学部学生を受け入れるため、2年次編入学制度を実施する学部の拡大に努めるとともに、帰国子女特別選抜については、その対象を永住権保有者に拡大し実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成17年度入学から法学部で2年次編入学制度(入学定員10人)を導入し、入学選抜を実施した。帰国子女特別選抜については、平成16年度入学から、出願資格に「日本国の永住許可を得ている者」を加えた。なお、帰国子女特別選抜の目的が、諸外国で多様な価値観に接し、わが国とは異なる教育制度のもとで教育を受けた者を入学させることにより国際交流の拡大と深化にふさわしい人材育成を一層推進することであることから、平成18年度以降の帰国子女特別選抜を、主として課題論文と面接によるAO入試型選抜とすることを決定し、一層の拡大・充実に努めることとした。 	

・ 入学者選抜組織については、平成18年度入試をその第一段階として、既存組織の見直しと一元化を検討・実施する。

・ 学部入学者の選抜組織（委員会等）については、平成18年度入試に向けて既存組織の見直しと一元化を検討し、結論を得る。

・ 平成16年6月に教育改革室の下に「入学者選抜組織一元化WG」を設置し検討を重ねた結果、これまで入試に関する各種の委員会やアドミッション・センターで分散して担っていた諸機能を統合し、入学者選抜に関する企画・広報・調査・実施の4部門を擁する新たな組織を設置するべきであるとのWG報告が7月に提出され、これに基づいて一元的に入学者選抜を統括する機能をもつ新たな「アドミッション・センター」を平成17年4月に設立する準備を整えた。

・ 高等学校及び入学志望者への説明会・模擬講義等を通じた情報提供、インターネットを利用した入試相談、学生の参加によるキャンパス・ツアー及び教育支援等、高大連携の拡充を図るとともに、入試広報関係の一層の整備を行う。

・ 高等学校及び入学志望者への説明会・模擬講義等を通じた情報提供、インターネットを利用した入試相談、学生の参加によるキャンパス・ツアー及び教育支援等、高大連携の拡充を図るとともに、入試広報関係の整備を行う。

・ 道内の旭川市、北見市、帯広市、釧路市及び道外の仙台市、宮崎市で、高等学校を会場として北大説明会（北大セミナー）を開催し、模擬講義を通じて高校生に北海道大学の魅力を伝えた。高校生からの入試に係るメールによる質問・相談は約350件あり、アドミッション・センター及び学部の入学相談室員が適宜回答した。また、本学を訪れた道内外の高等学校40校の高校生に対して、大学・学部説明会、模擬講義、学生によるキャンパスツアーなどを行った。さらには、前項のように広報も任務の柱とする新たなアドミッション・センター設立の準備を行った。

() 大学院課程
・ 大学院進学ガイダンスの実施
・ 充実並びに大学院授業のシラバス及び各研究科、専攻、研究室等の情報に関するホームページを充実させ、入学志望者に対して明確で豊富な情報を提供する。

() 大学院課程
・ 大学院への入学志望者に対して明確で豊富な情報を提供するため、大学院進学ガイダンスの実施・充実及び各研究科、専攻、研究室等の情報に関するホームページの充実と同時に、大学院授業のシラバスをホームページ上に掲載することについて検討する。

・ 全ての研究科において募集要項、研究室紹介をホームページに掲載し、閲覧できる状態とし、過去の修士課程入試問題については文学、教育学、法学、理学（数学を除く）、薬学、工学、水産科学、地球環境科学、国際広報メディア、情報科学の10研究科においてホームページに掲載し、シラバスについても教育学、水産科学、国際広報メディアの全専攻で、また理学の一部でホームページへの掲載を実施し、その他の研究科においても平成17年度の掲載に向け準備を行った。また、文学、教育学、法学、経済学、理学、医学、工学、国際広報メディア、情報科学の9研究科及び脳科学研究教育センターで進学ガイダンスを実施した。

・ 多様で優秀な学生を確保するため、大学院入学機会を複数化を進める。

・ 多様で優秀な大学院学生を確保するため、入学者選抜の年複数回実施及び入学者の受入の拡充について検討する。

・ 各研究科において態様は異なるが、前・後期それぞれでの入試あるいは特別選抜・一般選抜の実施をはじめとして入学者選抜の年複数回実施を行っている。また、入学者の受入れの拡充方策を制度と広報・進路指導などにわたって検討を行っている。なお、秋季入学については、修士課程では5研究科が実施し、9名が入学し、博士課程では8研究科が実施し、54名が入学した。

() 留学生、社会人学生
・ 学部・大学院とも、アドミッション・ポリシー、研究室案内等の外国語版をホームページ上に掲載し、奨学金、ポストドクター等、留学生に有益な情報を積極的に提供する。

() 留学生、社会人学生
・ 留学生に有益な情報を積極的に提供するため、学部・大学院とも、外国語版のホームページ上に、アドミッション・ポリシー、研究室案内等の掲載を推進する。

・ 学部では、文学、教育学、経済学、工学が全学科にわたって、また理学と薬学の一部学科が、大学院では、修士課程で文学、教育学、経済学の全専攻と理学、薬学、工学、農学、情報科学の一部専攻が、博士課程で文学、経済学、歯学の全専攻と理学、薬学、工学、農学、情報科学の一部専攻が外国語版ホームページに研究室案内や募集要項等の掲載を行った。未実施の学部・研究科にあっても広報委員会等において掲載の検討がなされ（教育学、地球環境科学など）、掲載している学部・研究科においても掲載内容の充実を検討している（文学、歯学など）。

・ 大学院においては、留学生及び社会人の特別選抜を拡充し、受入の拡大を図る。

・ 大学院における留学生及び社会人の受入の拡大を図るため、留学生及び社会人の特別選抜の拡充について検討する。

・ 留学生特別選抜は、理学及び医学を除くすべての研究科で修士課程と博士後期課程の両方またはいずれかで実施しており、社会人特別選抜は、医学を除くすべての研究科で同様に実施している。新たに平成17年4月設置の公共政策大学院においては、留学生特別選抜及び社会人特別選抜の実施について検討した。その結果、議員、自治体職員、NPO法人職員などの社会経験を積極的に評価することを募集要項で明らかにし、社会人特別選考合格者15名中、3名の高校卒業受験者を含む5名の大卒以外の受験者からの合格があった。

・ 留学生について、上記方策のほか、後記3の(1)の「留学生交流その他諸外国の大学等との教育研究上の交流に関する具体的方策」に掲げるところにより、受入の拡大に努める。

・ 留学生について、上記方策のほか、後記3の(1)の「留学生交流その他諸外国の大学等との教育研究上の交流に関する具体的方策」に掲げるところにより、受入の拡大に努める。

・ 留学生の受入数は、5月1日現在で平成12年度605名、平成13年度668名、平成14年度708名、平成15年度773名、平成16年度764名、同年11月には792名となり、順調に推移している。
なお、本学では受入数の拡大とともに質の確保への変更を図っている。具体的には、国際交流室（後記の1の参照）において「北東アジア戦略」を策定し、中国浙江大学、吉林大学及び韓国ソウル大学との大学院留学生招致プログラムを開始した。受入者には、月額8万円の奨学金を支給している。
また、海外の協定校へのPR活動として、3月に韓国の協定大学2校（忠南大学校、嶺南大学校）を訪問し、学生に対し、本学の紹介及び留学プログラムの説明を行った。

・ 社会人の入学志望者に対して、ホームページ等を活用し、入学案内の拡充を図る。

・ 社会人の入学志望者に対して有益な情報を積極的に提供するため、ホームページの内容等の充実を図る。

・ 社会人に対する情報提供は、医学及び地球環境科学を除く研究科で募集要項や研究室紹介などのホームページ掲載が行われている。特に平成16年度には、経済学研究科でホームページ改訂に伴い新たに社会人向けメニューを掲載し、また歯学研究科において社会人向けメニューを含むホームページの刷新を準備している。社会人特別選抜では専門科目試験を免除している研究科が少なからずあるが、専門科目試験等の学力試験を課している文学、教育学、

<p>教育理念等に応じた教育課程を編成するための具体的方策</p> <p>() 全学教育 前記(1)の「全学教育」の成果に関する具体的目標の設定に掲げる内容を達成するため、教養科目は、当面、以下の「一般教育演習」、「分野別科目」、「複合科目」、「共通科目」、「外国語科目」によりバランスの取れた教育課程を編成するとともに、学生の多様な学力レベルに対応した教育開発など、不断に教育内容の充実を努める。</p> <p>ア)「一般教育演習」は、現在、全国最大規模の年間延べ3,000人近くが履修する本学の特色科目であり、コミュニケーション能力、学問や社会の多様性の理解能力、そして豊かな人間性を涵養することを目指している。その一層の向上のために、研究林・牧場・練習船等の大学施設を活用した学部横断・フィールド活用・体験型少人数教育の充実も含め、内容のさらなる充実に努める。</p> <p>イ)「分野別科目」においては、異文化理解能力等を身に付けさせることを目指し、「複合科目」においては学際的な学問の発展の理解を深めさせ、及び体育学、情報処理等の共通性の高い基礎的な科目である「共通科目」においては、特に、コンピュータの基本的利用技術に習熟させ、高度なネットワーク社会に対応できるITスキル及びITモラルを身に付けさせることを目指し、それぞれ内容の一層の充実に努める。</p> <p>ウ)「外国語科目」では、「読む」、「書く」、「話す」、「聞く」能力のバランスのとれた向上を図るため、CALL(コンピュータ支援言語学習)システムを使用する授業科目の拡充を図るほか、このシステムを使用する科目の必修化・能力別選択必修科目の設定などを実現するとともに、学生に対して語学の自主学習に利用するよう修学指導に努める。</p>	<p>教育理念等に応じた教育課程を編成するための具体的方策</p> <p>() 全学教育 前記(1)の「全学教育」の成果に関する具体的目標の設定に掲げる内容を達成するため、教養科目は、以下の「一般教育演習」、「分野別科目」、「複合科目」、「共通科目」、「外国語科目」によりバランスの取れた教育課程を編成するとともに、これらの科目の充実を図る。</p> <p>ア)「一般教育演習」は、本学の特色科目であり、コミュニケーション能力、学問や社会の多様性の理解能力、そして豊かな人間性を涵養することを目指している。その一層の向上のために、研究林・牧場・練習船等の大学施設を活用した学部横断・フィールド活用・体験型少人数教育、論文指導等の充実を図る。</p> <p>イ)「分野別科目」においては、異文化理解能力等を身に付けさせることを目指すとともに論文指導の拡充を図り、「複合科目」においては学際的な学問の発展の理解を深めさせ、及び体育学、情報処理等の共通性の高い基礎的な科目である「共通科目」においては、特に、「情報教育科目」ではコンピュータの基本的利用技術に習熟させ、高度なネットワーク社会に対応できるITスキル及びITモラルを身に付けさせることを目指し、それぞれ内容の一層の充実に努める。</p> <p>ウ)「外国語科目」では、「読む」、「書く」、「話す」、「聞く」能力のバランスのとれた向上を図るため、CALL(コンピュータ支援言語学習)システムを使用する授業科目の充実を図るほか、このシステムを使用する科目の必修化・能力別選択必修科目の設定に向けて検討を行うとともに、学生に対して語学の自主学習に利用するよう修学指導に努める。</p>	<p>理学研究科の一部、国際広報メディア研究科では過去の入試問題の掲載を実施している。</p> <p>・ 全学教育における1,2年次の開講コマ数(週2時間で15週を1コマとする)は、一般教育演習で160、分野別科目で235、複合科目で56、共通科目290、外国語で1,011と、バランスの取れた教育課程を編成した。また、分野別科目における論文指導講義(履修者は30人を限度とする。)開講数の増加により、少人数教育の拡大と授業内容の充実改善を達成した。これらに加えて、芸術科目を充実させるため、分野別科目「芸術と文学」の科目責任者会議の下に専門部会を設けるとともに、地域連携型芸術科目担当の教育コーディネーターを配置した。</p> <p>・ 一般教育演習については、平成16年度は160コマ(平成15年度159コマ)を開講し延べ3,114名が履修した。このうち、論文指導を内容とする演習は、平成15年度においては17コマであったものを、平成16年度においては26コマに拡充し、延べ499名が履修した。また、本学の研究林・牧場・練習船等の大学施設を活用して自然に恵まれた北海道をフィールドとする体験型授業については、平成15年度の6コマ(履修者数は延べ142名)から平成16年度は9コマ(履修者数は延べ202名)への増加を実現した。</p> <p>・ 分野別科目においては、「思索と言語」、「歴史の視座」、「芸術と文学」、「社会の認識」、「科学・技術の世界」の5科目の授業を展開した。1学期125コマ、2学期110コマと、履修者数が多い1学期に多数開講し、総コマ数は前年度より24コマ増加した。また、開講時間帯ごとの開講数にも偏りが無いように調整した。これにより1学期は11,626名が、2学期は7,784名が履修した。この中でも少人数教育実現を追求し、論文指導科目については70コマ開講し昨年度よりも21コマ増とした。複合科目においては、「環境と人間」、「健康と社会」、「人間と文化」及び大学全体として企画する「特別講義」の授業を展開し、分野の異なる複数の教員による学際的な講義を行った。1,2学期を通じ昨年度より1コマ増の56コマを開講し、1学期の履修者は6,985名、2学期は3,932名であった。また、共通科目における「情報教育」においては、情報基盤センターとの連携によりe-ラーニング体制を強化するとともに、情報教育におけるモラル教育を授業開始前に実施した。</p> <p>・ 平成15年度までは、学生はCALLL教室で開講される授業を履修している者しかCALLLシステムを利用できず、主たる教材NetAcademyも一部の学生しか利用する機会がなかったが、平成16年度からは英語IVの全履修者にアクセス権を与えた。また、英語の授業は、教室の都合がつかざりCALLLシステムを利用して行うことにし、これによってCALLL教室の稼働率が増した(平成16年度後期のCALLL教室(4教室)の平均稼働率は64%)。さらに、今後の教育の充実を図るため、英語科目担当者と全学教育委員会において、平成17年度から現在の英語(必修2単位)の1単位を「英語CALLL」として開講することや、平成18年度以降は英語必修1単位を時間割に縛られない自学自習型CALLL授業とし、学期末にTOEFL-ITPの成績により評価することを検討した。</p>
<p>・ 基礎科目では、入学してくる学生の学力の多様化に対応するため、中等教育以下の新学習指導要領に応じた教育課程を編成し、数学、物理学、化学、生物学及び地学について各科目ごとに「コース別履修制度」の実施を具体化する。</p>	<p>・ 基礎科目では、平成18年度学部入学者の学力の多様化に対応するため、中等教育以下の新学習指導要領に応じた教育課程の編成を目指し、各科目(数学、物理学、化学、生物学及び地学)ごとの「コース別履修制度」の実施に向けた検討を進める。</p>	<p>・ 平成18年度入学者からの教育に関しては、平成15年7月に全学教務委員会教育戦略推進WGの下に設置された「平成18年度以降の教育課程専門部会」が平成16年4月に提出した「中間報告」を受けて、平成16年6月に教育改革室の下に「平成18年度以降の教育課程検討WG」を設置して検討し、12月に最終報告がなされた。さらに、これを受けて平成18年度以降の教育課程を具体化するために、平成17年1月、教育改革室に「GPA・上限設定・成績評価実施検討WG」、「自然科学実験テーマ検討WG」、「文系基礎科目検討WG」及び「交換性科目・理系基礎科目・入門科目検討WG」を設置して検討を重ねた。理系基礎科目については、「交換性科目・理系基礎科目・入門科目検討WG」においてコース別履修制度について原案を作成し、各学部に表示して、各学部の意見を徴しつつ、各コース別に設定する理系基礎科目の内容・到達目標を具体的にまとめる方向で検討を開始し、同様に「文系基礎科</p>

<ul style="list-style-type: none"> 北海道に立地する国立総合大学として、アイヌ民族をはじめとする北方諸民族に関する教育を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 北海道に立地する国立総合大学として、アイヌ民族をはじめとする北方諸民族に関する教育を充実させるため、同内容の開講科目数の拡大を図る。 	<p>目検討WG」でも文系基礎科目の新設及びこれを具体化する教育課程について検討を開始した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 全学教育科目で「アイヌ文化とアイヌ語」、「知里幸恵『アイヌ神謡集』を読む」、「北方の文化と生態」、「北大総合博物館で学ぼう - ヒグマ学入門」など6科目を開講し、平成15年度の3科目から開講数を倍増させた。学部教育では、文学部で27科目にわたり北方文化関係科目を開講した。また、今後の北方民族研究教育の推進を目的として、平成16年12月、企画・経営室（後記の1の参照）に「北方諸民族研究教育体制整備に関するWG」を設置し、研究教育体制の基本的方向について検討を開始した。
<ul style="list-style-type: none"> () 学部教育 <ul style="list-style-type: none"> 創造的かつ体系的な学部一貫教育を提供するため、教養科目、基礎科目、専門科目及び国際交流科目の充実を図るとともに、各科目間における内容の重複等を整理し、整合性を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> () 学部教育 <ul style="list-style-type: none"> 創造的かつ体系的な学部一貫教育を提供するため、全学教育の教養科目及び基礎科目、並びに専門科目及び国際交流科目の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成18年度から「平成11年告示学習指導要領」に基づく教育を受けた学生が入学してくることに伴って、教養教育と学部専門教育の有機的連関を重視した学士課程の構築について、平成16年6月に教育改革室の下に設置した「平成18年度以降の教育課程検討WG」において検討し、平成16年12月に最終報告を公表した。さらに、この報告の実現のため4つのWG（GPA・上限設定・成績評価実施検討、自然科学実験テーマ検討、文系基礎科目検討、交換性科目・理系基礎科目・入門科目検討）を平成17年1月に設置し、学士課程全体を通して体系的で一貫性のあるカリキュラムの構築を目指して検討を行った。また、国際交流科目と全学教育科目又は専門科目との合同授業について授業科目名（日本語）と講義題目（英語）の形式を整理するとともに、シラバス作成要領等を明確化した。
<ul style="list-style-type: none"> 学部専門教育における理系基礎科目については、学部の枠を越えた交換性科目（異なる学部で展開されている共通の内容をもつ科目）として単位の共通化を図ることや、これらを全学教育におけるコース別履修制度と接続させることについて検討し、成案が得られ次第実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学部専門教育における理系基礎科目については、学部の枠を越えた「交換性科目（異なる学部で展開されている共通の内容をもつ科目）」として単位の共通化することや、並びに交換性科目を全学教育の基礎科目におけるコース別履修制度と接続させることについて、具体的に検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成17年1月に教育改革室の下に「交換性科目・理系基礎科目・入門科目検討WG」を設置し、コース別履修制度（専門系コース・準専門系コース）について原案を策定し、これを関係学部の意見を徴しつつ、各コース別に設定される理系基礎科目（数学、物理学、化学、生物学）の内容・到達目標を具体的にまとめる方向で検討を開始した。
<ul style="list-style-type: none"> 学部・学科等の特性に応じ、研究室・ゼミへの分属等の少人数教育をさらに進め、進路指導並びに人間教育を含めた個別指導を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 進路指導及び人間教育を含めた個別指導を行うため、学部・学科等の特性に応じ、研究室・ゼミへの分属等の少人数教育をさらに進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 学士課程教育における少人数教育は本学の特徴である。全学教育における一般教育演習と分野別科目の論文指導講義とともに、専門教育ではゼミナール、研究室単位の教育を基礎としている。専門教育の開講科目数3,157のうち、25人以下の科目は1,450である。
<ul style="list-style-type: none"> () 大学院教育 <ul style="list-style-type: none"> 大学院授業のシラバスを整備するとともに、総合大学として研究科の枠を越えた連携を図り、大学院共通授業科目を拡大する。 	<ul style="list-style-type: none"> () 大学院教育 <ul style="list-style-type: none"> 大学院授業のシラバスの内容を充実させるとともに、総合大学として研究科の枠を越えた連携を図り、「大学院共通授業科目」の開講数を拡大する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院授業のシラバスは、修士課程では文学（検討中）、農学（平成17年度から作成し、HPでの公表に向け準備）を除く11研究科、博士課程では文学、教育学、薬学、農学を除く11研究科で作成されており、学生の履修にあたっての利便性を考慮し、フォーマットの改善（理学）、成績評価率の記載の検討（工学）、HPでの公表の検討（法学、工学、農学）等の内容の充実を図っている。また、平成12年度から研究科の枠を超えた横断的な教育課程を編成して実施している大学院共通授業の開講科目数及び履修学生は年々大幅に増加し、平成15年度において24科目、1,161名の履修者であったが、平成16年度には35科目、履修者は1,568名となった。
<ul style="list-style-type: none"> 高度専門職業人の育成のための特別な教育課程の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院課程における高度専門職業人の育成のため、学位論文に代えてリサーチペーパーの提出により修了させる等の特別な教育課程（特別コース、専修コース等）の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 修士課程における高度専門職業人育成については、法学研究科、経済学研究科が修士専修コース等を設置し、リサーチ・ペーパーあるいは研究成果報告書の提出をもって修士論文に代えることとし、コースワークを中心とした大学院教育を行っている。また、文学研究科では「日本語・日本文化特別コース」など4つの特別コースにおいて高度専門職業人育成を目的とした教育を行い、修士論文に代えて「特定課題演習」を履修することを可能としている。理系では、薬学研究科が「臨床薬学コース」、水産科学研究科が「広領域教育コース」を設け、他の研究科も高度専門職業人育成の新たな方法検討を開始した。
<ul style="list-style-type: none"> 学生の研究水準を向上させるため、修士論文、博士論文、学会誌投稿論文等の執筆や学会発表を促すよう、指導体制の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院学生の研究水準を向上させるため、修士論文、博士論文、学会誌投稿論文等の執筆や学会発表を促すよう、指導体制の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 各研究科において、先端的研究への大学院学生の取組を指導し、国際雑誌や学会誌などへの投稿と学会やワークショップでの報告を促進した。この結果、平成16年度に修士課程在学者の修士論文以外の論文は966編、学会発表数は3,253件、博士課程在学者の学術論文は1,579編、学会発表数は2,797件であった。
<ul style="list-style-type: none"> 学生に対して、早期に第一線級の研究者との協働を体験させるため、国内外での研究活動・学会に参加させるよう指導体制 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院学生に早期に第一線級の研究者との協働を体験させるため、国内外での研究活動・学会に参加させるよう指導体制の 	<ul style="list-style-type: none"> 学会旅費等への補助を含めて各研究科・専攻・講座・研究室とも大学院学生の学会参加促進に努力し、学会参加数は修士課程で国際430、国内2,927、博士課程で国際747、国内2,539であった。

<p>の充実を図る。</p> <p>授業形態、学習指導法等に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学士課程においては、各学期ごとに、学生各自の履修科目登録における単位数の上限を設定することについて、学部単位ごとから逐次実施する。 	<p>充実を図る。</p> <p>授業形態、学習指導法等に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学部学生に各年次にわたって適切な授業科目を履修させるための履修科目登録における単位数の上限を設定することについて、各学部ごとに検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 履修登録の上限設定については、教育改革室において平成18年度以降の教育課程編成における学士課程第1年次への導入に向けて検討を進めている。また、各学部においても学士課程全体での履修上限設定を含めた新教育課程を確立するよう平成16年9月に全学教務委員会委員長から各学部長に対し文書で依頼するとともに、全学教務委員会においても要請し、これに基づき7学部(文・教育・経済・理・歯・薬・農学部)で検討を開始した。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育効果を高めるため、学士課程、大学院課程とも、学生参加型授業、少人数授業及び体験型授業や、インターンシップ等の社会経験・実地研修型授業等を拡充する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育効果を高めるため、学士課程、大学院課程とも、学生参加型授業、少人数授業及び体験型授業や、インターンシップ等の社会経験・実地研修型授業等の拡充に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ これらの授業改善については、教育改革室において検討するとともに、教務委員会委員長から各学部長・研究科長に対して要請するなど、全学的な課題として取り組んできた。この結果、少人数教育については、全学教育において一般教育演習や論文指導講義の拡充などを通じて推進し、人数の多い講義に関してはTAを配置するようになった。学部専門科目においても開講科目3,157のうち履修者25人以下の科目は1,450、履修者26人から50人の科目が853となった。また、インターンシップは、平成16年度から学部・大学院にかかわらず全学的に実施することとし、学部では全学教育科目として開講するとともに、3学部が独自に専門科目として開講し、単位認定を行った。また、4研究科においても独自にインターンシップに関する科目を開講して、単位認定を行った。さらに、単位認定はされないが、5研究科の学生がインターンシップに参加した。インターンシップ以外の社会経験・実務研修型授業も3学部の専門教育、2研究科で開講し、体験型授業としては学問分野の特性に基づき、調査実習や早期臨床実習等を開講している。学生参加型授業は、大学院課程及び学士課程の演習等では一般的だが、講義においても各教員の努力で推進されており、学生による授業アンケートの結果によると、「効果的に学生の参加を促したか」という設問に対し、肯定の意見(強く思う、そう思う)が平成15年度42.3%から平成16年度は47.3%に増加した。また、経済学部での卒業研究への報奨制度の導入や国際広報メディア研究科で自治体と共同して政策提案を行う授業の実施等、学習意欲を高め授業に積極的に参加させる特色ある取組を実施した。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学士課程の演習、実習等は、ティーチング・アシスタントを有効に活用し、きめ細やかに指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学士課程の演習、実習等においてきめ細やかな指導を行うため、ティーチング・アシスタントの有効活用を努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全学教育及び学部専門科目の演習、実習を担当する教員のきめ細やかな指導の補助を目的にTAを採用する科目を増やすとともに採用数を拡大してきた。TAの採用者数は、平成15年度には1,916名であったが、平成16年度には2,140名(全学教育340名、専門教育1,800名)に増加した。また4月に全学TA研修会を開催して、大学教育の基礎、教育技術等を理解させ資質の向上を図り、各学部においてもTA研修会などを開催した。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学院課程における学位取得率の向上を図るため、学位授与基準の見直し及び基準設定の拡大に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学院課程における学位取得率の向上を図るため、学位授与基準の設定及び見直しについて検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学院博士課程における学位取得率向上については、各研究科においてこれまで種々の努力が払われてきた。また、平成16年度に設置された教育改革室に役員補佐と至員から構成される検討グループを設けて、学部並びに大学院教育・研究指導に関して全学的な取組体制を構築する必要性と取組にあたっての論点を整理した。これに基づいて平成17年3月の教育改革室会議において、学位に関わる制度を含めた大学院での教育、研究指導制度等の検討を行うWGを平成17年度に設置することとした。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報基盤センター及び附属図書館を中心として、情報メディアを活用した教育の実施・支援を強化・拡充する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報リテラシー能力の育成や教育効果の向上のため、情報基盤センター及び附属図書館を中心として、情報メディアを活用する教育の実施・支援を強化・拡充する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報基盤センターは1,254台の教育用コンピュータを全学に配置し、さらに附属図書館に増設して教育情報システムのオープン利用環境を強化・拡充するとともに、協調学習のためのグループ用ポータル提供、e-ラーニング利用可能な教育用コンテンツ配信、札幌・函館キャンパス間におけるハイビジョン画質での遠隔教育環境の提供などを行った。また、附属図書館は情報検索入門授業を53回、文献検索ワークショップを12回、ライブラリー・セミナーを19回行うなど、情報メディアを活用した教育支援を実施した。情報基盤センターが提供する教育情報システムは、全学部生によって利用されている。そのIDは教育用の統合IDとして使用され、1年次第1学期に行われる情報教育によって学生にIDを取得させるとともに、基本的な情報教育を行っている。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の学修意欲の向上やボランティア等の社会活動を促進するため、顕彰制度の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の学修意欲の向上やボランティア等の社会活動を促進するため、顕彰制度の充実の一環として、新たな制度を創設する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生顕彰制度としては、これまで、本学の基本理念の一つである「全人教育」の充実のため課外活動、社会活動で特に優れた功績等があった者に対する「北大えるむ賞」、学業優秀者に対する「クラーク賞」が全学の制度としてあり、部局にあっても学習意欲の向上を目的として経済学部、医学部、歯学部、工学部、工学研究科、情報科学研究科に顕彰制度が設けられていた。平成16年度に、さらに学生の課外活動の充実と更なる活性化を図るため、「北大えるむ賞」に該当しない活動であって特に優れた活動を行った者に対する新顕彰制度を設けることについて学生委員会において検討し、平成17年度から「北大ベンハロー賞」による顕彰制度を実施することを決定した。 	

<p>適切な成績評価等の実施に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> シラバス等による成績評価基準や成績分布の公表は、既に学士課程で実施しているが、大学院課程（修士課程）においても実施するため、成績評価基準の見直しを行う。 	<p>適切な成績評価等の実施に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 成績評価基準の明示並びに厳格な成績評価を徹底させるため、学士課程においては、引き続き成績評価基準や成績分布の公表範囲の拡大を図るとともに、大学院課程（修士課程）においては、成績評価基準の見直しに着手する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学士課程では、全学教育において実施されている厳格な成績評価及び成績分布の公表範囲を拡大し、学部専門科目についても実施するよう、平成16年9月に全学教務委員会委員長から各学部長に対して文書で依頼するとともに、全学教務委員会においても要請した。また、全学教育においては、各科目の成績評価・内容を調査・検討する組織として「成績評価・授業評価結果検討専門部会」を設置して、成績評価を含めた授業評価を行い、特に、成績分布に顕著に偏りがあるとみられる教員に対し個別に事情を聞くことを含めて成績評価の改善を推進した。大学院教育においては薬学研究科、国際広報メディア研究科などにおいて平成16年度から成績評価基準の検討に着手した。
<ul style="list-style-type: none"> 学士課程に「秀」評価（優の上に秀を加えて5段階評価とする）及びGPA（grade point average）制度を導入し、修学指導等に積極的に活用するよう努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学卒業者の質を保証するシステムの一環として、学士課程における、「秀」評価（優の上に秀を加えて5段階評価とする）及びGPA（grade point average）制度の導入に向けた準備を進めるとともに、修学指導等への積極的な活用方法について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「秀」評価及びGPA制度の導入については、教育改革室の下に設置した「『秀』評価及びGPA制度実施検討WG」から平成16年12月に提出のあった「『秀』評価及びGPA制度の実施について（報告）」に基づき、新たに教育改革室の下に設置した「GPA・上限設定・成績評価実施検討WG」において平成17年度からの実施に向けて検討し、その結果を平成17年3月の「『秀』評価及びGPA制度の実施について（Q&A）」として公表した。あわせて「秀」評価導入の規程改正を行い、平成17年度からの実施の準備を行った。これにより、平成18年度からの本格的な成績評価制度改革の基礎を確立した。

大学の教育研究等の質の向上
 1 教育に関する目標
 (3) 教育の実施体制等に関する目標

中期目標	<p>職員の配置に関する基本方針 北海道大学の教育に関する目標を達成するために必要な教員組織の整備・充実を図るとともに、これを有機的に機能させるための教育支援体制を強化する。</p> <p>教育環境の整備に関する基本方針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ キャンパスが学生の学習及び生活の場であり、多くの人々との触れあいや多様な経験、学問を通じて人間性が育まれることに鑑み、本学特有の優れた自然環境を有効に活用して、すべての学生にとって最良の学修環境を整える。 ・ 教育施設設備を計画的に整備充実するとともに、情報基盤センターを中心にキャンパス全体の電子情報環境を整備する。また、附属図書館の教育支援・学術情報センター機能を強化する。 <p>教育の質の改善のためのシステムに関する方針 個々の教員による教育活動の評価を充実させるとともに、教育貢献を業績として重視する。また、各学部・研究科の組織としての教育活動を評価する。さらに、授業改善を目的とした適切な研修の推進を図る。</p>
------	---

中期計画	年度計画	計画の進行状況等	
<p>適切な職員の配置等に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 北海道大学の教育に関する目標を達成するために必要な学科・専攻等を構成し、それぞれの学科・専攻等における教育研究を実施するにふさわしい教員組織の整備・充実を図るため、3の3の「中長期的視野に立った適切な人員（人件費）管理に関する具体的方策」に掲げるところにより、適切な教員編制としうるシステムを確立する。 	<p>適切な職員の配置等に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 北海道大学の教育に関する目標を達成するために必要な学科・専攻等を構成し、それぞれにおける教育研究を実施するにふさわしい教員組織の整備・充実を図るため、3の3の「中長期的視野に立った適切な人員（人件費）管理に関する具体的方策」に掲げるところにより、適切な教員編制としうるシステムについて検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 適切な教員編制としうるシステムの一環として、運営費交付金の一定割合を全学に留保し、総長のリーダーシップの下で全学的な視点から定員または人件費の措置を講じる全学運用定員制度を導入した。同制度の運用に当たっては、教育研究の新たなニーズに的確かつ柔軟に対応し、組織の再編成を行う上で必要とされるものを優先して措置した。 ・ また、平成16年度は、人件費を全学管理とし、教員については「国立大学法人北海道大学教員配置規程」を制定し、各部署等別に学内定員を設定して人員管理を行った。あわせて、人件費総額による人件費管理の下で、柔軟かつ適切な教員編制を行うことが可能なシステムについて、平成17年度中に成案を得る方向で、問題点の整理等を含めて検討を進めた。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 3の3の「中長期的視野に立った適切な人員（人件費）管理に関する具体的方策」に掲げるところにより、演習や実験指導等に教育支援職員を適切に配置するための体制を整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3の3の「中長期的視野に立った適切な人員（人件費）管理に関する具体的方策」に掲げるところにより、演習や実験指導等に教育支援職員を適切に配置するための体制について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「企画・経営室」の下に設置した「人事関係事項検討WG」（以下「人事WG」という。）において、技術職員に関わる組織等の教育支援体制の見直し方策について検討するとともに、助手等の職の在り方の検討に關連して、技術職員、教務職員を含めた教育研究支援職員の在り方について検討した。本年度の検討結果に基づき、平成17年度中に、この問題に関する基本的な方向について、成案を得る予定である。 	
<p>教育に必要な設備、図書館、情報ネットワーク等の活用・整備の具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 豊かな自然及び歴史的な景観を保全しながら、老朽化した施設を順次改修するとともに、バリアフリー環境の整備に努める。 	<p>教育に必要な設備、図書館、情報ネットワーク等の活用・整備の具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 老朽化した施設の改修については、豊かな自然や歴史的な景観の保全、及びバリアフリー環境にも配慮しつつ、1の「施設等の整備に関する具体的方策」に掲げるところにより実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 老朽施設再生整備として、バリアフリー環境の実現に配慮しつつ、以下の事業を実施した。 医学部東（南）棟の改修 法科大学院など専門職大学院の設置に対応した既存施設改修による必要スペースの確保 北海道大学病院・歯科診療センターの設備改修及び屋上防水工事の実施 歴史的建造物としての外観維持に配慮した環境資源バイオサイエンス研究棟改修施設整備等事業（PFI事業）の事業者の決定 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 講義室においては視聴覚装置・プレゼンテーション装置等の教育設備の充実に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講義室においては、視聴覚装置・プレゼンテーション装置等の教育設備の充実に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全学教育については、平成11年度に始まった高等教育機能開発総合センター講義室等の改修工事に合わせ、視聴覚装置等の整備を順次行った。また、携帯用の各種視聴覚機器を事務室に備え、要望に応じて貸し出す体制が整備されつつある。各部署においても、必要性の高い液晶プロジェクターを中心に整備が行われた。全学の設備設置率は、ビデオは講義室で67%、演習室で54%、スクリーンは同じく97%、58%、液晶プロジェクターは43%、20%、OHPは57%、20%などとなっている。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 附属図書館における学生の学習に必要な資料を充実し、留学生・国際対応サービスを拡大するとともに、学術研究コンテンツを整備し、ネットワーク情報の利用環境の改善に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 附属図書館においては、学生の学習に必要な資料の充実、並びに学術研究コンテンツや図書目録データベースの整備・充実によるネットワーク情報の利用環境の改善に努めるとともに、 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 附属図書館においては、平成16年度は、学生の学習に必要な資料として図書約28,700冊を受け入れた。図書目録データベースの整備については、平成16年度に新規に受け入れた全図書約40,000冊と過去に受け入れた図書のうち約58,000冊の目録データを電子化し、図書目録データベースに追加した。また、留学生・国際対応サービスを拡充するため、国際交流科目の参考図書185冊及び留学生向け図書83冊を国際交流科目図書コーナーに配架するとともに 	

<ul style="list-style-type: none"> 情報基盤センターを整備し、それと連携してキャンパス・ネットワーク環境の充実に努める。 	<p>留学生・国際対応サービスを拡大するため、国際交流科目図書コーナーの充実や、情報提供の観点からホームページ上の外国語版の拡充を図る。</p>	<p>に、ホームページ上に利用案内ページの中国語版及び韓国語版を新たに設けたほか Floor guide や Library Calender を中心に英語版の充実を図った。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 学生の正課授業及び課外の体育活動のための施設の充実に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 情報基盤センターにおいては、セキュリティの確保や利便性を向上させるため、キャンパス・ネットワークの整備を進めるとともに、マルチメディアを活用する教育の支援に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 情報基盤センターにおいては、札幌・函館キャンパス間のネットワーク接続方式の変更、Windows Mediaサーバの新規導入、老朽化した設備の更新、ファイアウォール等のソフトウェアライセンスのバージョンアップ等によりネットワークの利便性の向上やセキュリティ監視機能の強化を図った。なお、全学の教育に供するために、1,254台のクライアントコンピュータを全学に分散配置し、教育情報システムを提供している。同システムは、授業時間外もオープン利用できるようになっている。全学教育の情報教育や外国語教育から専門教育科目におけるレポート等オープン利用を主とする授業まで様々な形態の授業が同センターを活用して実施されている。
<ul style="list-style-type: none"> 学生の正課授業及び課外の体育活動のための施設の充実に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生の正課授業及び課外の体育活動のための施設の充実に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 野球場Bグラウンド改修、水産学部厚生会館改修、中央食堂内部補修、北西食堂内部補修及びクラーク会館集会所改修を実施するとともにヨット部に救助艇を購入した。また、サッカー・ラグビー場を平成17年度に改修する準備として埋蔵文化財の試掘と本調査を実施した。
<p>教育活動の評価及び評価結果を質の改善につなげるための具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 各教育組織において、前記(1)の「教育の成果・効果の検証に関する具体的方策」に掲げるものを含め、組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価するための体制並びに評価結果を教育の質の向上及び改善に結びつける体制を確立する。 	<p>教育活動の評価及び評価結果を質の改善につなげるための具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 各教育組織において、前記(1)の「教育の成果・効果の検証に関する具体的方策」に掲げるものを含め、組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価するための体制並びに評価結果を教育の質の向上及び改善に結びつける体制の整備に着手する。 	<ul style="list-style-type: none"> 国立大学法人北海道大学評価規程において本学における評価の基本的事項を定め、評価室を設置するとともに、各部局等を点検及び評価を行う「実施部局」とし、部局評価組織を置くこととした。各部局等においては、同規程に基づき内規を定め、部局評価組織を設置した。また、評価室において、本学における評価の概要や評価室と各総長室・各部局等との役割分担等の全学的方針を取りまとめ各部局等に周知した。
<ul style="list-style-type: none"> 学生による授業アンケートを引き続き実施するとともに、その結果への教員の対応を学生に公開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生による授業アンケートを引き続き実施するとともに、その結果への教員の対応を学生に公開することについて検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学では平成11年度から継続的に授業アンケートを実施しており、平成16年度も引き続き実施した(実施授業数976科目、実施率66%)。なお、本年度においては、授業アンケートの妥当性・信頼性を検討するため、後期実施授業で全学的にサンプル授業を抽出して、特別版のアンケートを実施した。この特別版アンケートでは、受講生による授業アンケートを記名式とするとともに、当該授業担当教員から学業成績評価並びに出席率のデータの提出を求めて、これらに対応させて分析する。現在、集計・分析中である。アンケート結果への教員の対応を学生に公開することについては、評価室の下に設置した授業評価WGにおいて他大学の実施例を調査するとともに、想定される公開方法及びそのメリット・デメリット等を取りまとめるなどの検討を行った。なお、公開方法等については平成17年度中に成案を得ることとしている。
<ul style="list-style-type: none"> 教育活動に対する自己点検・評価の結果をファカルティ・ディベロップメント(FD)の充実に活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育活動に対する自己点検・評価の結果をファカルティ・ディベロップメント(FD)の充実に活用する方策について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生の授業評価アンケートや4年に一回調査する学生生活実態調査等に記載の様々な意見要望等をまとめ、TA研修会や新任教員研修会等を実施する際の資料として活用した。オフィスアワー及びクラスアワーにおける学生からの意見やクラス担任自ら感じたこと等をまとめ、クラス担任会議に配付するとともに対応等も含めて説明を行った。また、全学教育に係る成績分布を各科目責任者に配付し、各科目ごとの成績評価基準を定める資料に活用するとともに、各授業担当教員に対し、成績評価基準のガイドラインをまとめて配付した。なお、水産学部で実施したFDにおいては、授業アンケート結果の成績上位者を講師としてミニレクチャーを行い、グループ討論を行うなど自己点検・評価の結果を積極的に活用した。
<p>教材、学習指導法等に関する研究開発及びFDに関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育ワークショップ、新任教員研修会等の研修機会を一層充実させるとともに、実施時期、業務分担など、参加し易い環境を整備する。また、ティーチング・アシスタントを担当する大学院学生には、これまでどおり事前に研修を受講させ、その資 	<p>教材、学習指導法等に関する研究開発及びFDに関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育ワークショップ、新任教員研修会等の研修機会を一層充実させるとともに、適切な実施時期の設定、参加者の業務を分担するなど、参加し易い環境を整備する。また、ティーチング・アシスタントを担当する大学院学生には、引き続き事前に研 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年6月に「新任教員研修会」を開催し、北海道大学の歴史と学風、法人化後の教員の権利・義務、学生指導、心のケアなどについて107名(参加率71%)を対象に研修を実施した。同研修会では、講演、パネル討論に加えて、「双方向授業」のための実践的な課題も取り入れた。11月には教育ワークショップを「Webを利用した授業の設計」をテーマに講師以上の経歴5年未満の教員32名を対象に開催した。これには岩手大学等の学外者4名も参加した。また、4月に全学教育科目に関わるTA研修会を開催し、全学教育を担当するTA165名(参加率49%)が参加し、あわせて専門科目で任用された45名も参加した。同研修会においては、実験系、情報系、語学系、講義系、演習系の5グループにわたっての討論を含む指導を行った。なお、医学部、歯学部、工学部及び水産学部においては独自のFDを実施す

<p>質の向上に努める。</p> <p>・ 教育に関する研究開発プロジェクトに対して、適切な学内支援措置を講じる。</p>	<p>修を受講させ、その資質の向上に努める。</p> <p>・ 教育に関する研究開発プロジェクトに対して、適切な学内支援措置を講じる。</p>	<p>るとともに、水産学部においては、教員とT Aとの合同研修会も実施した。</p> <p>・ 重点配分経費を活用し、全学に公募を行い「全学教育プログラム開発研究等プロジェクト」20件、「教育研究プログラム開発研究プロジェクト」8件の計28件の研究開発プロジェクトを採択し、総額19,520千円の支援を行った。</p>
<p>学内共同教育等に関する具体的な方策</p> <p>・ 学部及び大学院における外国語教育を実施するとともに、言語及び文化に関する教育研究を推進する。</p>	<p>学内共同教育等に関する具体的な方策</p> <p>・ 言語文化部は、学部及び大学院における外国語教育を実施するとともに、言語及び文化に関する教育研究を推進する。</p>	<p>・ 言語文化部においては、学部及び大学院における外国語教育を実施し、全学教育の外国語科目で第1年次学生の第1学期・第2学期合わせて702コマ（履修者は24,962名）、第2年次学生の第1学期・第2学期合わせて323コマ（履修者は7,868名）開講し、外国語特別講義（全学教育の外国語演習と外国語Cを含む）を第1学期・第2学期合わせて134コマ（履修者は大学院生409名を含む2,370名）開講した。なお、C A L L教室（4教室）を利用し、英語中心に第1学期に週当たり61コマ、第2学期に週当たり64コマ開講しており、平成17年度以降のC A L Lシステムを利用した教育の在り方について検討を行った。</p>
<p>・ 留学生に対して日本語、日本文化・日本事情の教育及び修学・生活上の指導・助言を行うとともに、海外留学を希望する学生に対する情報提供や指導・助言に努める。</p>	<p>・ 留学生センターは、留学生に対して日本語、日本文化・日本事情の教育及び修学・生活上の指導・助言を行うとともに、海外留学を希望する学生に対し、年2回の「海外留学説明会」を開催するなど情報提供や指導・助言に努める。</p>	<p>・ 留学生センターでは、平成17年度に向けて授業の効率化を図り、学生ニーズの多様化に対応するため、日本語コースの再編準備を行った。</p> <p>また、留学生指導部（教員2名）による相談業務を、留学生・日本人学生及び学内教職員を対象に週4回行った。</p> <p>海外留学を希望する学生に対しては、平成15年度まで「海外留学説明会」を年2回開催していたが、平成16年度から、新たに「交換留学説明会」、「中国留学説明会」などの目的別説明会を含め5回開催し、個別のニーズにあった留学情報の提供に努めた。また、潜在的な留学希望者の掘り起こすため、学内5箇所に世界地図付きの情報提供掲示板を新設し、留学生センターのHPを充実、さらに留学ハンドブックの作成・配布を行った。</p>
<p>・ 全学教育、入学者選抜及び高大連携に関する企画並びに教育方法の開発・改善及び生涯学習に関する研究を推進する。</p>	<p>・ 高等教育機能開発総合センターは、全学教育、入学者選抜及び高大連携に関する企画並びに教育方法の開発・改善及び生涯学習に関する研究を推進する。</p>	<p>・ 高等教育機能開発総合センターには、全学教育部並びに高等教育開発研究部、生涯学習計画研究部、入学者選抜企画研究部の3研究部がある。全学教育部においては、全学教育科目の企画・調整を行った。また、高等教育開発研究部では、全学教育の充実に関する研究、T A研修の在り方に関する研究等が、生涯学習計画研究部ではユニバーシティ・エクステンション（大学教育の拡張）に関する研究、地域連携教育・人材育成の推進に関する研究等が、入学者選抜企画研究部ではA O入試に関する研究等が行われており、これらの研究成果は各種出版物を通して学内の教員等に周知されただけでなく、F Dや入学試験の企画、地域社会の生涯学習計画の策定等にも実践的に生かされた。</p>
<p>・ 学術標本の収蔵、展示、公開及び学術標本に関する教育研究の支援並びにこれらに関する研究を推進するとともに、地域社会への教育普及に寄与する。</p>	<p>・ 総合博物館においては、学術標本の収蔵、展示、公開及び学術標本に関する教育研究の支援並びにこれらに関する研究を推進する。また、市民に開かれた博物館として、土・日曜日、祝日を閉館日とし、北海道大学に通底する精神を伝える「都ぞ弥生」展などの企画展を行い、毎月第2土曜日には市民への公開セミナーを実施するなどして、地域社会への教育普及に寄与する。</p>	<p>・ 総合博物館では、地域社会の教育普及に関しては、土・日曜日・祝日を閉館することにより一般市民や観光客の来館が増加し、平成16年度の入館者数は4万5千人に達した。7月には札幌市内の文化施設や民間施設等の夜間開放を行う「カルチャーナイト2004」にも参加した。また、「都ぞ弥生」展などの企画展を開催するとともに、水環境分野で世界的に高い評価を受けた本学出身者の研究の紹介や大学院学生が自らの研究テーマについて企画・準備した展示など研究成果の公開を行った。外国人研究員（客員教授）3名を招へいし、関係分野の本館教員等との共同研究を展開するとともに、大学院学生・学部学生の教育にも当たった。社会教育面においても毎月第2土曜日に行っている土曜市民セミナー（北海道が実施している生涯学習講座「道民カレッジ」の連携講座を通じて積極的な活動を実施した。</p>
<p>・ 学生及び職員の心身の健康管理に関する専門的業務を実施する。</p>	<p>・ 保健管理センターは、学生及び職員の心身の健康管理に関する専門的業務を実施する。</p>	<p>・ 保健管理センターでは、定期健康診断をはじめとする種々の健康診断を行うとともに、健康相談、応急的な診療及びカウンセリングを行った。特に平成16年度は、例年新入生の健康診断の受診率が低い（平均75.1%）ことから日程を見直すとともに、クラス担任による指導を導入するなど実施体制を改め、受診率の向上（98.5%）を実現した。また、メンタル面のケアの一環として、センター内で、映画会、音楽会及び朗読会を定期的に開催し、他部局と協力して講演活動を行った。</p>
<p>・ 保健及び体育に関する教育を実施するとともに、学生及び職員の課外活動等における体育指導などを通じて、体力の向上、健康増進に寄与する。</p>	<p>・ 体育指導センターは、保健及び体育に関する教育を実施するとともに、学生及び職員の課外活動等における体育指導などを通じて、体力の向上、健康増進に寄与する。</p>	<p>・ 体育指導センターでは、学生、職員を対象にスポーツ懇話会「ボートの専門的トレーニングとそのコーチング」や一般市民を対象に公開講座「チャレンジ“転倒予防”」を実施した。また、NHKと共催でスポーツセミナー「早野宏史のサッカートーク」を実施し、日本生理人類学会と共催で「高所トレーニングと超高度運動能力の養成」等を演題とした講演会を実施した。</p>
<p>学部・研究科等の教育実施体制等に関する特記事項</p>	<p>学部・研究科等の教育実施体制等に関する特記事項</p>	<p>・ 高い政策能力を持った国際的にも通用する人材の養成を目指し、文理融合型の公共政策に関する専門職大学院を設置するため、「公共政策大学院設置</p>

<p>・ 国家資格等の職業資格に関連した人材や社会的に高度な専門職業能力を有する人材の養成に基幹総合大学として積極的に応え、その使命を果たしていくため、公共政策大学院及び会計専門職大学院等の設置を検討し、逐次その実現に努める。</p>	<p>・ 国家資格等の職業資格に関連した人材や社会的に高度な専門職業能力を有する人材の養成に基幹総合大学として積極的に応え、その使命を果たしていくため、公共政策大学院及び会計専門職大学院の設置を検討し、その実現に努める。</p>	<p>準備委員会」(全学委員会)において、設置構想、教員人事及び入学試験の実施準備等を審議し、「公共政策学教育部」「公共政策学連携研究部」の設置計画を策定した。なお、「公共政策学教育部」の設置計画(平成17年4月設置)については、文部科学省大学設置・学校法人審議会における審査を経て、文部科学大臣から設置を認められた。</p> <p>また、公認会計士制度の充実・強化に伴い、同制度を担う高度な会計専門職を育成するため、本学大学院経済学研究科を改組し、会計情報専攻を設置するため、経済学研究科教授会において、教員人事等を含めた設置構想を審議し、「経済学研究科会計情報専攻」の設置計画を策定した。なお、設置計画(平成17年4月設置)については、文部科学省大学設置・学校法人審議会の審査を経て、文部科学大臣から設置を認められた。</p>
---	--	---

大学の教育研究等の質の向上
 1 教育に関する目標
 (4) 学生への支援に関する目標

中期目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の要望等を積極的に受け入れ、改善を図りつつ、入学から卒業・修了まで快適な大学生活を過ごさせるため、学生の自主活動を支援するとともに、奨学金等の経済的支援を強化する。 ・ 社会の高度化、複雑化に伴い、入学してくる学生も多様化していることに鑑み、大学として、心身の健康、修学、就職等、多岐にわたる相談機能を充実・強化する。 ・ 社会にそして世界に開かれた大学として、社会人及び留学生の学修環境の整備に努める。
------	--

中期計画	年度計画	計画の進行状況等	
<p>学習相談・助言・支援の組織的対応に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新生ガイダンス・オリエンテーション等の内容の見直しを行うなどにより一層の充実を図る。 <p>入学時のほか、在学期間における学修・進学相談指導体制を、全学的・組織的に整備する。</p>	<p>学習相談・助言・支援の組織的対応に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大学における学修システムや生活上の留意事項を確実に理解させるため、学部新入生ガイダンス・オリエンテーション等の内容の見直しについて検討する。 <p>初年次学部学生における相談体制を充実させるため、クラス担任の業務内容を明確に位置付けることにより、成績不良者、留年者及び留学生等への個別対応の徹底化を図るとともに、従来の学生個人等がクラス担任と相談するためのオフィスパワーに加え、クラス単位でクラス担任と相談するためのクラスアワーを設ける。高年次の学生においても、学習指導体制の一層の充実を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入学式前に実施する学部新入生ガイダンス、オリエンテーション等の内容について、全学教育委員会、全学教育小委員会において検討した結果、平成17年度から履修指導のみならず、学生生活全般についても指導・支援を強化するよう改善することとし、平成17年3月に「クラス担任全体会議」を開催し意見交換を行うとともに、クラス担任への保健管理センターからのメンタルヘルスに関するレクチャーや学生相談室からの報告及び安全教育の充実指示を実施した。 ・ クラス担任の職務については、クラス担任マニュアルを作成して周知を図り、全学教育科目で連続して欠席した学生については担当教員からクラス担任等へ報告する体制を整えた。また、1年次1学期におけるオフィスパワー、クラスアワーの設置を徹底させるとともに、オフィスパワーとクラスアワーの実態について、クラス担任にアンケートを実施し状況を把握し、改善のための資料を得た。高年次学生については、ゼミナール(演習)や研究室での学生への少人数教育あるいは個別指導が一般的であるが、これに加えて8学部が進級ガイダンス、オフィスパワーの設置を実施した。 	
	<p>生活相談・就職支援等に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生相談室、保健管理センター、クラス担任等の学生相談業務の任に当たる者の連携強化を図る。 <p>学生から学習・研究環境及び生活環境に関する意見・要望を聞き、それに速やかに対応する体制は、現在、学部学生のうち全学教育履修者を対象として高等教育機能開発総合センターで実施しているが、さらに各学部・研究科を含めて全学的視点から整備拡充する。</p>	<p>生活相談・就職支援等に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の生活上の相談機能を充実させるため、学生相談室、保健管理センター、クラス担任、各学部の担当組織等の連携を図る。各学部の担当組織等について検討する。 <p>学生から学習・研究環境及び生活環境に関する意見・要望を聞き、それに速やかに対応する体制は、現在、学部学生のうち全学教育履修者を対象として高等教育機能開発総合センターで実施しているが、さらに各学部・研究科を含めて全学的視点からの整備拡充について検討する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生相談室、保健管理センター、クラス担任等の学生相談業務の任に当たる職員の連携強化を図るため、学生相談室相談員及び保健管理センター医師・カウンセラー等による学生相談関係者懇談会を開催し、情報交換を行った。また、クラス担任全体会議に学生相談室長が出席し、学生相談体制の現状、学生からの相談に係る対応方法等について説明を行うなど、連携の強化を図った。 ・ 高等教育機能開発総合センターでは投書箱を設け、投書に対する回答を掲示板に掲示している。また、センターに学生相談室を設けており、平成16年度の学生の来室は344件、延604名であり、学業、対人関係、健康など幅広い相談に応じた。各学部や大学院にあっては、少人数の教育・研究指導が演習や研究室を単位に行われており、それらを通じた学生の意見・要望の聴取が日常的に行われている。これに加えて、法学、工学、獣医学、水産学の計4部局が投書箱を設置し、地球環境科学研究科、国際広報メディア研究科、脳科学研究センターでは学生へのアンケートを実施した。また、歯学、薬学では研究室所属前の学生に対し、クラス担任以外に5名程度に一人の指導教員を配置する等、少人数を対象として教員が学生の意見を聞くシステムを整えた。
<ul style="list-style-type: none"> ・ カウンセリング体制について、アカデミック・ハラスメント、セクシュアル・ハラスメントに対する相談体制・防止対策も含めて整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ カウンセリング体制のうち、セクシャル・ハラスメントに対する防止対策も含めた相談体制は、平成15年度に体制の強化及び「防止等に関するガイドライン」を制定するなどの整備の充実を図っており、さらに、学生・職員を対象に啓発活動を行 	<ul style="list-style-type: none"> ・ セクシャル・ハラスメントへの対応については、ホームページに「セクハラになりうる言動について」、「セクハラ防止等に関するガイドライン」、「相談員名簿」、「セクハラへの対応図」等を掲載した。セクハラ防止等対策室長から各部局等の長に対して、文書でセクハラ防止について協力要請を行った。また、学生相談室長が、部局で開催される講演会で、セクハラ・アカハラ防止について講演を行う等防止に努めるとともに、相談員の資質の向上を図るため、セクハラ相談員に対する業務内容説明会を実施した。 	

	<p>い発生の防止に努めるとともに、相談員の資質の向上を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> アカデミック・ハラスメントについては、防止対策も含めた相談体制の整備について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> アカデミック・ハラスメント防止を図るため、教育改革室の下で「アカデミック・ハラスメント防止公開シンポジウム」を開催するとともに、アカハラ相談システムの構築、ガイドライン作成のため、北大、東北大、東大、東工大、九大の5大学による「アカデミック・ハラスメント」対処のための5大学合同研究協議会を開催し、平成16年7月に第1回報告書を公開するとともに、相談体制の整備等についての検討を行った。 	
<ul style="list-style-type: none"> 学生のサークル活動やボランティア活動等に対する支援機能の整備充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生のサークル活動やボランティア活動を支援するため、サークル活動に対してはリーダー養成講座や事故防止講習会等を実施し、ボランティア活動に対しては「学生ボランティア相談室」において活動先の紹介やボランティア養成講座等を実施するとともに、それらの支援機能の充実について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> サークル活動に対しては、体育系学生団体の育成及び競技力の向上を図るための「リーダーズ・アッセンブリー」、交通事故、飲酒事故の予防・防止並びに安全対策への意識の向上を図るための「事故防止に関する講習会」、登山事故防止を図るための「冬山登山講習会」を実施した。また、ボランティア活動の支援として「救急救命講習会」を実施した。また、学生ボランティア活動相談室を137日開室し、560名の利用があった。 	
<ul style="list-style-type: none"> 平成16年度に全学的な就職支援体制を構築し、学生への就職情報の提供、多様な就職支援活動の充実を図る。また、教育効果の向上のみならず、就職支援の観点からもインターンシップ制度の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生が自主的に企画・立案を行う、キャンパス生活の充実、地域社会との連携及び本学のPR活動等のプロジェクトに対して、経費の助成を行う「北大元気プロジェクト」を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「北大元気プロジェクト2004」募集を平成16年6月に実施し、応募のあった28件のうち「北大キャンパスビジットプロジェクト」「出身国・地域言語による『留学生の声』ストーリーミング事業」「学生スパコンプロジェクト」など16件のプロジェクトを採択し、プロジェクト遂行に必要な物品等の経費として456万円を超える助成を行った。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 学生への就職情報の提供や多様な就職支援活動を充実させるため、「キャリアセンター」を設置し、全学的な就職支援体制を整備する。また、教育効果の向上のみならず就職支援の観点からも、学部の新設等においてインターンシップの科目を新設するとともに、キャリア教育の推進について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年4月に「北海道大学キャリアセンター」を設置し、ホームページなどによる就職情報の提供、広報誌「キャリア通信」の発行、各種ガイダンスやセミナー等（36回開催、延べ3,881名参加）あるいは企業等の個別説明会（69回開催、延べ14,278名参加、延べ416社参加）などを開催するとともに、企業向けパンフレットを発行し、併せて企業開拓も行うなど全学的な就職支援体制を整備した。また、キャリア教育として、「インターシップA（2単位）、B（1単位）」科目の開講とインターンシップの推進を行うほか、キャリア教育科目「キャリアデザイン」の新規開講に関してキャリア教育に関する研究会をつくって具体的な検討を行った。 	
<p>経済的支援に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 入学金、授業料免除等の経済的支援を充実させるとともに、その採択基準の見直しについて検討する。 	<p>経済的支援に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 学生に対する経済的支援を充実させるため、入学金、授業料免除等の採択基準の見直しについて検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年8月に教育改革室の下に「授業料等免除の取り扱いにかかる検討WG」を設置し検討を行った結果、総長決定枠として、専門職大学院について入学試験の成績が優秀と認められた者（上位10%）に入学金免除及び授業料免除（入学年次に限る）を行うこと、その他の学生にあっては、経済的困窮度を重視して採択することなどの採択基準の見直し案の報告が11月になされ、これに基づいて平成17年度入学者に対する入学金、授業料減免措置を実施した。 	
<ul style="list-style-type: none"> 大学院学生・ポストドクターへの研究助成や国外での学会発表などに対する助成、学部学生の外国留学の助成、及び奨学金等については、本学の教育・研究活動を支援する団体等と連携を図りつつ、支援の充実を努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院学生・ポストドクターへの研究助成や国外での学会発表などに対する助成、学部学生の外国留学の助成及び奨学金等については、本学の教育・研究活動を支援する「財団法人北海道大学クラーク記念財団」等と連携を図りつつ、支援の充実を努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院学生等の国際学会等出席のため、平成16年度は本学国際交流事業基金から1件20万円を10件助成（平成15年度は1件20万円を8件）、また、クラーク記念財団と連携を図り、1件20万円を20件助成（同1件20万円10件）することにより、海外における学会発表の機会拡大を図った。また、法・医・工・農・情報科学研究科などが部局独自の基金により、132件（15年度87件）に対し海外渡航及び研究助成を行った。 	
<p>社会人・留学生等に対する配慮</p> <ul style="list-style-type: none"> 全学的視点のもとに、留学生担当専任教員を配置する制度について検討する。 	<p>社会人・留学生等に対する配慮</p> <ul style="list-style-type: none"> 留学生に対する修学上・生活上の支援を一層充実させるため、全学的視点のもとに、留学生担当専任教員を配置する制度について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 留学生への支援体制の充実・強化に向けて留学生担当専任教員の職務の明確化及び配置の見直しを図るため、平成16年10月に国際交流室の下に「留学生担当専任教員の配置WG」を設置し、留学生担当専任教員の交代時における任期制の導入、職務に関する全学共通マニュアルの作成等について、平成17年度中の策定を目的に検討を開始した。 	
<ul style="list-style-type: none"> 本学留学生を支援する団体と連携を図りつつ、大学としての留学生の支援に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学留学生を支援する「北海道大学外国人留学生後援会」等と連携を図りつつ、日常生活面における支援に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 北海道大学外国人留学生後援会と連携し、「留学生の賃貸住宅入居に伴う連帯保証」として平成16年度は176名の保証を行った（平成15年度約100名）。また、「留学生の不慮の事故等に対する経済支援」として1名の留学生に10万円を貸与し、さらに、「留学生を支援する団体に対する経済的支援」として、北海道大学国際婦人交流会で留学生向けに発行している印刷物の刊行費 	

<ul style="list-style-type: none"> 留学生及び外国人研究者の学修及び研究を実りあるものとするため、その家族を支えるボランティア団体等との連携を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> 留学生及び外国人研究者の学修及び研究を实りあるものとするため、その家族を支えるボランティア団体「北海道大学国際婦人交流会」等と連携を図りつつ、日常生活面における支援に努める。 	<p>として約100万円を援助した。 また、市民ボランティア団体の協力を得て、新規受入れ留学生を主対象として春・秋の2回、中古自転車を各約60台配付した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 留学生、外国人研究者及びその家族に対する支援のため、北海道大学国際婦人交流会と連携し、「初歩の日本語と日本事情」を内容とした入門、初級及び中級の3クラスの日本語サロンを開設するほか、盆踊り、餅つき等の異文化交流並びに年3回の生活必需品の提供(ガレージセール)等を展開した。 	
<ul style="list-style-type: none"> 社会人学生について、長期履修学生制度(標準修業年限を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し修了することを認める制度)を実施すること、働きながら学修できる教育環境の整備に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会人学生について、働きながら学修できる教育環境を整備するため、大学院において「長期履修学生制度(標準修業年限を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修し修了することを認める制度)」を新たに導入するとともに、「大学院設置基準第14条(教育方法の特例)」を実施する研究科の拡大を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 長期履修制度を平成16年度から導入し、学内規程及び内規の整備を行った。この結果、大学院の11研究科で受入れ体制を整備し、5研究科で合わせて23名の学生に長期履修を許可した。また、14条特例については、法学研究科が新たに実施したことにより実施研究科は7研究科に拡大した。 	

大学の教育研究等の質の向上
 2 研究に関する目標
 (1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標

中期目標	<ul style="list-style-type: none"> 北海道大学は、研究主導型の基幹総合大学として、あらゆる学問分野で世界的水準の競争に耐えうる研究を展開し、人文科学、社会科学及び自然科学それぞれの既存学問分野において国際的に高く評価される研究成果を示すとともに、先端的、学際的、また複合的な領域において、新しい時代の規範及び新規学問領域創生の萌芽となる研究を開拓する。 北海道及び周辺寒冷地の自然環境、文化、産業、生活等に関わる地域性・公共性を重視した研究をこれまで以上に強化し、北海道、さらにはアジア、北方圏地域をはじめとする国際社会への貢献を図る。 研究水準及びその成果について、適切な検証により不断の向上を図る体制を構築する。
------	--

中期計画	年度計画	計画の進行状況等	
<p>目指すべき研究の方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> 全地球的な新規課題への機動的対応を図り、新たな学問領域の創生、産業活性化への貢献という視点をより鮮明にした研究の推進を図る。 	<p>目指すべき研究の方向性</p> <ul style="list-style-type: none"> 全地球的な新規課題への機動的対応を図り、新たな学問領域の創生、産業活性化への貢献という視点をより鮮明にした研究の推進を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 後記 で述べるように、様々な研究分野において新たな学問領域の創成、産業活性化への貢献という視点をより鮮明にした研究が行われた。特に、創成科学研究機構において、学際的な新学問領域の重点的開拓、社会的変化へ機動的に対応した部局横断的研究推進を戦略的に実施した。 また、21世紀COEプログラム「生態地球圏システム劇変の予測と回避」では、森林などの生態系と固体、大気、海洋といった地球圏が互いに作用しあうことにより、環境が自力で回復不可能となる100年程度の時間スケールの激変についての新たな学問領域の創生を行った。 	
<ul style="list-style-type: none"> 本学が創設から現在まで継承し発展させてきた基礎及び応用科学における特徴ある学問分野をさらに強化するために、常に世界をリードする研究を推進し、その研究目的を確実に達成することを基本とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学が創設から現在まで継承し発展させてきた基礎及び応用科学における特徴ある学問分野をさらに強化するために、常に世界をリードする研究を推進し、その研究目的を確実に達成することを基本とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 後記 で述べるように、様々な研究分野において基礎及び応用科学における学問分野を強化し、世界をリードする研究が行われた。特に、21世紀COEプログラム「人獣共通感染症制圧のための研究開発」では、人獣共通感染症の制圧に向けた世界最高水準の研究を推進するとともに、その制圧対策を立案、指揮できる専門家を育成し世界に供給することを目的とした研究が実施された。平成17年にはこれらの成果に基づき「人獣共通感染症研究センター」を学内共同教育研究施設として設立することとし、その準備を行った。 	
<ul style="list-style-type: none"> 本学の研究の特徴である北海道の特性・地域性に根ざした研究を引き続き推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学の研究の特徴である北海道の特性・地域性に根ざした研究を引き続き推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 後記 で述べるように、様々な研究分野において北海道の特性・地域性に根ざした研究が行われた。特に、創成科学研究機構では、日本の食料自給率の向上とその安全性の確保の観点から、北海道の食糧基地としての重要性は益々高まっていることに鑑み、科学技術振興調整費による戦略的研究拠点育成のなかで、「食の安全・安定供給」プロジェクトを推進し、上記の社会的要請に対応している。ここでは、重点的に「根圏」、「腸内圏」における重要な生理機能を解析するとともに、この領域における有用微生物の培養化、単離、実用化を行い、「食の安全・安定供給」を実現する新領域の開拓を目指した。 	
<p>大学として重点的に取り組む領域</p> <ul style="list-style-type: none"> 北海道大学の基本的目標に鑑み、数理・物理学、ナノテクノロジー、生命医科学、バイオテクノロジー、情報科学、エネルギー科学、地球環境科学、人間・社会統合科学、グローバルイノベーション研究、知的財産研究等の新たな時代における問題解決及び技術革新が要求されている先端的・複合的領域において、世界的研究拠点として、あるいは研究拠点形成を目指して、研究を推進する。 	<p>大学として重点的に取り組む領域</p> <ul style="list-style-type: none"> 北海道大学の基本的目標に鑑み、数理・物理学、ナノテクノロジー、生命医科学、バイオテクノロジー、情報科学、エネルギー科学、地球環境科学、人間・社会統合科学、グローバルイノベーション研究、知的財産研究等の新たな時代における問題解決及び技術革新が要求されている先端的・複合的領域において、世界的研究拠点として、あるいは研究拠点形成を目指して、研究を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 年度計画に記載した研究領域については、21世紀COEプログラム、科学研究費基盤研究S、新世紀重点研究創成プラン等により大型プロジェクト研究を立ち上げ、平成16年度も世界的研究拠点あるいは研究拠点形成を目指し、それぞれの研究を推進した。 平成14年度採択の21世紀COEプログラムについては、平成16年度に中間評価が行われたが、本学のプログラムは全て5段階の評価の上位の評価を得た。 	
<ul style="list-style-type: none"> 上記領域のほかに、旧来の学問体系を超えた新たな学問領域の創生を果たすために、複合的学際的領域における世界的研究拠点形成の核となりうる研究を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 上記領域のほかに、旧来の学問体系を超えた新たな学問領域の創生を果たすために、複合的学際的領域における世界的研究拠点形成の核となりうる研究を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学際的な新学問領域の重点的開拓、社会的変化へ機動的に対応した部局横断的研究推進を戦略的に実施する組織としての創成科学研究機構においては、生命系、ナノテクノロジー・材料系、情報系、エネルギー系、環境系、広域文化系、未踏系の7分野の研究領域を重点研究分野として推進した。 なお、21世紀COEプログラム「新・自然科学創成」では、地球科学分野と生物分類・進化学分野の融合により、自然界、特に人類の生存圏であ 	

<ul style="list-style-type: none"> 地域社会の文化的・経済的活性化及び公正な発展への貢献のため、特にその歴史・文化、自然及び社会環境に対する理解を深めるとともに、地域産業の高度化・安定化等並びに新規起業に寄与する研究を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域社会の文化的・経済的活性化及び公正な発展への貢献のため、特にその歴史・文化、自然及び社会環境に対する理解を深めるとともに、地域産業の高度化・安定化等並びに新規起業に寄与する研究を推進する。 	<p>る地球表層圏（岩石圏、水圏、大気圏そして生物圏）の多様性と進化を包括的に理解するための研究教育を行い、自然史学（博物学）から分化した地球科学と生物分類学・進化学の2大領域を、現代的な視点から再統合し、新しい学問領域である「新・自然史科学」を創成を目指している。</p> <ul style="list-style-type: none"> 21世紀COEプログラム「海洋生命統御による食糧生産の革新」では、技術開発の基礎となる海洋生物の生命科学は、陸上生物にはない独自の機能を解明するものであることから、同研究拠点で得られる成果により、現在の生命科学体系とは異なる新しい学問分野を拓き、その学問的価値は極めて高いと言える。 現在、函館圏では、同研究拠点を中核とする産学官の新たな活性化の推進が図られており、たとえば、構造改革特区のひとつ「マリノフロンティア科学技術研究特区」（内閣府）、地域再生計画「函館国際水産・海洋都市構想の推進 - 水産・海洋に関する学術・研究拠点都市の形成 -」（内閣府）、地域新生コンソーシアム研究開発事業「沖合漁業のためのコピキタスな活動支援システムの研究開発」及び「普漁情報の収集を目的とした海洋環境モニターPIの開発」（北海道経済産業局）、「都市エリア産学官連携促進事業（函館エリア）」（文部科学省）などが進行中であり、このように地域社会と融合して優れた知的教育環境が構築されつつある。 また、地域産業の高度化や新規起業に寄与する研究として札幌ITカレッジの創成や日系企業の中国市場における情報リスク調査研究をはじめとして、全学的に様々な研究が行われた。 なお、北海道に立地する国立総合大学として、アイヌ民族をはじめとする北方諸民族研究の推進を目的として、平成16年12月に企画・経営室に「北方諸民族研究教育体制に関するWG」を設置し、研究教育体制の基本的方向についての検討を開始した。 	
<ul style="list-style-type: none"> 基幹総合大学として、大学のみが能く担う基礎的領域における研究の今日的及び将来的意義を見極め、その成果を発展的に継承することに努めるとともに、近未来における人類の福祉への貢献はもとより、さらに普遍的な視点に立った研究の推進にも努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 基幹総合大学として、大学のみが能く担う基礎的領域における研究の今日的及び将来的意義を見極め、その成果を発展的に継承することに努めるとともに、近未来における人類の福祉への貢献はもとより、さらに普遍的な視点に立った研究の推進にも努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 文学研究科や理学研究科をはじめとして、全学的に様々な基礎的領域における研究が行われた。 特に21世紀COEプログラム「特異性から見た非線形構造の数学」においては、日本は数学研究の先進国でありながら、諸外国に比べ、社会における数学の重要性が十分に認識されてこなかった歴史的背景に鑑み、非線形構造という様々な分野に共通の重要課題について数学的基礎を築くとともに、他分野との連携を一層進展させることを目指し、その結果生まれる新たな数学的問題を基礎から応用まで有機的に体系化することにより、数学自身を深化させるとともに、他分野の根源的な進展を促した。 	
<p>成果の社会への還元に対する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 成果を市民や地域社会、企業等に分かり易く伝えるため、印刷物、データベース、ホームページ等の多様な媒体を用いた広報活動及び放送、インターネット等の手段を含めた公開講座、公開展示等の充実を図り、北海道大学を拠点とする情報発信の頻度を高める。 	<p>成果の社会への還元に対する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 成果を市民や地域社会、企業等に分かり易く伝えるため、印刷物、データベース、ホームページ等の多様な媒体を用いた広報活動、及び公開講座、公開展示等の充実を図り、北海道大学を拠点とする情報発信を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学では、研究者の研究業績を平成11年度からデータベース化して公表しており、平成16年度も内容の更新を行った。 印刷物では、広報誌「リテラポリ」の構成を刷新し、最新の研究動向を写真や図を取り入れ、読みやすく親しみやすい内容にして伝えた。ホームページでは、図、アニメーションを活用などの工夫を行い、また、本学の研究に関する雑誌や新聞掲載内容を掲載した。 公開講座も一般市民、高校生等を対象に多数の講座が開講され、多数の受講があった。 総合博物館では、常設展示だけでなく様々な企画展示により研究成果の情報発信を行った。 	
<ul style="list-style-type: none"> 産学官連携のもとで、研究成果を産業技術として社会に移転・還元する体制のより一層の整備を図るとともに、連携基盤醸成のための交流事業を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 産学官連携のもとで、研究成果を産業技術として社会に移転・還元する体制の整備を図るとともに、連携基盤醸成のための交流事業を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学の研究機能や知的財産の活用能力を高めるうえで、知の創造から活用まで一連の流れを一元的に掌握できる組織を整備する必要から、「先端科学共同研究センター」と「創成科学研究機構」との統合を平成17年4月を目途に進めた。 また、企業ニーズ発展を促進するためのシステムとして、「産学官連携研究会」、「北大北キャンパス・周辺エリア産学官連絡会」を設置し、科学技術と産業振興に役立つ事業展開を推進した。 	
<ul style="list-style-type: none"> 研究者個人のみならず大学としても、企業等との密接な連携体制を構築し、技術交流、人材交流、人材育成などを通じて、研究成果を社会に還元する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学と企業等との包括連携等を整備し、技術交流等を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 富士電機ホールディングス(株)を始めとして、(株)U.F.J.キャピタル、日本政策投資銀行、(株)電通北海道、(独)物質・材料研究機構、(独)産業技術総合研究所の計4社2機関との間において各関連分野の技術交流を展開するための研究交流、研究者の相互技術交流等を目指す人材交流、インターンシップ、MOI教育等実施のための人材育成を推進するため包括連携協定を締結した。 また、既に締結している2社（(株)日立製作所、三菱重工(株)）とは研究交流推進等を図った。 	
<ul style="list-style-type: none"> 成果の社会への還元に資するため、知的財産たる特許取得件数の増加を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> 成果の社会への還元に資するため、知的財産たる特許の出願を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 特許の出願を推進するため、重点配分経費による特許出願経費の予算化、インターネットを活用した発明届の受付、知的財産審査会の定期開催、各研究科教授会における職務発明制度の説明会開催を実施した。 これにより、特許出願件数は前年度19件に比較して大幅に増加し252件となった。 	

<ul style="list-style-type: none"> 地球規模での自然環境保全と人間活動の両立を目指す資源有効活用、持続型食糧生産等の人類共生に関する研究を通じ、世界、とりわけアジア及び北方圏の環境と生活向上並びに産業・経済等の発展に寄与することに努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 地球規模での自然環境保全と人間活動の両立を目指す資源有効活用、持続型食糧生産等の人類共生に関する研究を通じ、世界、とりわけアジア及び北方圏の環境と生活向上並びに産業・経済等の発展に寄与することに努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 農学研究科、地球環境科学研究科、低温科学研究所等をはじめとして、全学的に様々な研究が行われた。 特に、21世紀COEプログラム「生態地球圏システム劇変の予測と回避」においては、北海道の自然の中で基礎を築いた自然科学、とりわけフィールド科学に秀でた本学の特長を生かし、寒冷域に軸足を置く地球環境科学研究の中心となり、科学技術基本計画が環境分野に期待している「人類の生存基盤や自然生態系にかかわる地球変動予測」と「人類の健康や生態系に有害な化学物質のリスクを極小化する技術の開発」を担った。 また、アジア発展途上地域における伝統的農業技術の生態経済学研究やポスト冷戦時代のロシア・中国関係とそのアジア諸地域への影響研究などアジア・北方圏の環境、産業・経済に関する研究も数多く行われた。 	
<ul style="list-style-type: none"> 北海道の産業・経済及び自治の活性化に寄与する研究をより一層推進するとともに、北海道の歴史及び民族の研究を促進し、北海道文化の発展にもこれまで以上に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> 北海道の産業・経済及び自治の活性化に寄与する研究をより一層推進するとともに、北海道の歴史及び民族の研究を促進し、北海道文化の発展にもこれまで以上に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> 北海道の産業・経済そのものの研究から、特許・起業により活性化に寄与する応用研究まで、全学的に様々な研究が行われた。 特に、21世紀COEプログラム「海洋生命統御による食糧生産の革新」では、函館圏で同研究拠点を中核とする産学官の新たな活性化の推進が図られており、地域社会と融合した優れた知的教育環境を構築し、北海道文化の発展に貢献している。 	
<ul style="list-style-type: none"> 成果発表としての学術書及び優れた教科書、並びに研究成果の社会への普及を図る啓発書・教養書等の刊行を推進する活動への支援に配慮する。 	<ul style="list-style-type: none"> 成果発表としての学術書及び優れた教科書、並びに研究成果の社会への普及を図る啓発書・教養書等の刊行を推進する活動への支援に配慮する。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究の成果発表としての学術書及び優れた教科書、並びに研究成果の社会への普及を図る啓発書・教養書等を刊行する任意団体である北海道大学図書刊行会について、大学出版部として組織を整備するため、同刊行会の設置形態について役員会で協議し、同刊行会が計画した「中間法人化」する方針に賛同した。また、本学から採択された21世紀COEプログラムの活動報告書刊行などに同刊行会を活用した。 	
<p>研究の水準・成果の検証に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究成果を、それぞれの研究分野において評価の高い学術誌に原著論文として、あるいは国際的に通用する著書として公表するとともに、国内外の学会・シンポジウム等において世界に向けて発信するように努める。 研究領域ごとに専門家による外部評価を受ける体制づくりを進める。 	<p>研究の水準・成果の検証に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究成果を、それぞれの研究分野において評価の高い学術誌に原著論文として、あるいは国際的に通用する著書として公表するとともに、国内外の学会・シンポジウム等において世界に向けて発信するように努める。 研究領域ごとに専門家による外部評価を受ける体制づくりについて検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究戦略室（後記の1の参照）では、タイムズ社などの世界の大学ランキングのベースとなっているデータを解析し、教員の研究業績の客観的評価のための資料を積極的に提示した。また、研究成果の著名な国際雑誌への投稿の奨励、先端的研究を誘導するための大型外部資金導入の戦略の立案を行った。 学術論文については、平成15年度6,815（うちレフェリー付5,706）件だったものが、平成16年度は8,077（同6,567）件、国際学会等への発表件数は、1,643（うち国際604）が2,558（同1,011）と増加した。 研究領域ごとの外部評価については、評価室において、研究活動の評価を行うに当たって公正中立を期すための方策の一環として検討し、検討項目、留意事項等の論点を整理した。 	

大学の教育研究等の質の向上
 2 研究に関する目標
 (2) 研究実施体制等の整備に関する目標

中期目標	学際的複合的な新規学問領域の創生と社会の急激な変化に対応した時代の要請に対する機動的な対応を常に念頭において、 ・ 高度な研究の維持と一層の推進を可能にする柔軟な研究組織及び世界水準の研究環境、充実した支援基盤を整備するとともに、教員の流動化を促進する。 ・ 組織としての研究活動及び個々の研究者による研究活動を厳正に評価するシステムを確立するとともに、そのシステムを研究の質的向上と改善にフィードバックしうる体制を構築する。 ・ 研究活動より生じた知的財産について、これを適正に管理し、社会に還元するシステムを整備する。
------	--

中期計画	年度計画	計画の進行状況等	
戦略的研究推進に関する具体的方策 ・ 研究推進戦略に関わる組織を編成し、本学の主導すべき研究プロジェクトの推進等について立案するとともに、本学における研究推進体制の在り方について多角的に検討する体制を立ち上げる。 ・ 大型研究教育プロジェクト等の獲得を円滑に行うための情報収集・分析、企画立案・調整を行う体制を整備する。	戦略的研究推進に関する具体的方策 ・ 研究推進戦略に関わる組織として研究戦略室を設置し、本学の主導すべき研究プロジェクトの推進等について立案するとともに、本学における研究推進体制の在り方について多角的に検討する体制を整備する。 ・ 大型研究教育プロジェクト等の獲得を円滑に行うための情報収集・分析、企画立案・調整を行う体制を整備する。	・ 研究に関する将来計画等を企画立案するため、平成16年4月に研究戦略室を設置した。研究戦略室は研究担当の理事(副学長)を室長とし、理事2名、役員補佐3名、教員4名、学術国際部長で構成し、包括連携、産学官連携ポリシーなどを企画立案し、各種外部資金に関する情報収集や教員の業績評価のための資料の提示などを行った。 ・ 研究戦略室の設置により、大型研究教育プロジェクト等の獲得を円滑に行うための情報収集・分析、企画立案・調整を行う体制を整備した。研究戦略室においては、各種外部資金の獲得に向けて、本学での科学研究費、受託研究、共同研究、寄附金の過去の実績、他大学等の情報を収集した。また、平成16年度は、これらの情報をもとに世界的レベルの戦略的プロジェクト研究の推進の一環として、特に大型科学研究費の獲得に向けて、重点配分経費を活用し、大型科学研究費の獲得を目指している研究等に対して戦略的に研究助成を行った。	
適切な研究者等の配置に関する具体的方策 ・ 大学としての将来計画並びに研究課題の規模及び重要度・緊急度に応じた機動的な研究者配置を行うため、の1の「全学的視点からの戦略的な学内資源配分に関する具体的方策」に掲げるシステムを活用した採用を行う。 ・ 研究分野の特性に応じ、民間組織・政府機関等から幅広く多様な人材を獲得するため、人事採用システムの弾力化を図る。 ・ 研究者の流動性を高めるとともに優れた人材を確保するため、の3の「任期制・公募制など教員の流動性向上に関する具体的方策」に掲げるところにより、任期制の導入や公募制の推進に取り組む。 ・ 研究の効率的な推進と円滑な実施、特に重要度・緊急度の高	適切な研究者等の配置に関する具体的方策 ・ 大学としての将来計画並びに研究課題の規模及び重要度・緊急度に応じた機動的な研究者配置を行うため、必要に応じての1の「全学的視点からの戦略的な学内資源配分に関する具体的方策」に掲げるシステムを活用した採用を行う。 ・ 研究分野の特性に応じ、民間組織・政府機関等から幅広く多様な人材を獲得するため、人事採用システムの弾力化について検討する。 ・ 研究者の流動性を高めるとともに優れた人材を確保するため、の3の「任期制・公募制など教員の流動性向上に関する具体的方策」に掲げるところにより、任期制の導入検討を促進するために必要な調査研究を行うとともに、公募制の推進に取り組む。 ・ 研究の効率的な推進と円滑な実施、特に重要度・緊急度の高	・ 大学の将来計画並びに研究課題の規模及び重要度・緊急度に応じた機動的な研究者の配置を行うため、全学運用定員制度の活用により、以下のとおり教員定員を配置し、全学運用定員を活用した採用を行った。 情報科学研究科の新設に伴う定員配置とそれに関連した電子科学研究所への定員配置 医学部保健学科及び獣医学研究科の組織整備に伴う定員配置 21世紀COEプログラムへの積極的支援を目的とするスラブ研究センターへの定員配置 IODP(Integrated Ocean Drilling Program(総合国際深海掘削計画))の国際拠点形成への協力を目的とする理学研究科への定員配置 病院経営の観点からの定員配置 創成科学研究機構の研究企画室充実のための定員配置 公共政策大学院の設置準備に伴う定員配置 ・ 人事WGにおいて、外国人教員や任期付き教員等を対象とした年俸制の導入や、民間から人材を登用した際の弾力的な給与格付け等を視野に入れた柔軟な給与制度の設計について検討した。 なお、高度の専門的知識・経験や、優れた識見を有する者を戦略的に学外から任期を付して招聘する場合又は専門職大学院の実務家教員を雇用する場合等に適用することを想定して、新たに「特定職基本給表」を設けた。 ・ 研究科等における任期制導入についての検討状況を調査し、その結果を取りまとめた。平成17年度も引き続き、調査結果を分析した上で、任期制の導入の検討が進んでいない研究科等に対して、任期制導入を促す方策を検討する。なお、人事WGにおいて助手等の職の在り方を検討しており、新たな助教職については任期制の導入も含めて検討している。 また、公募制については、研究科等における公募の実施状況や、公募によらない選考を行っている場合には、その理由等について調査し、それらの結果を取りまとめた。今後、調査結果を分析した上で、公募制の在り方について検討する。 ・ 研究の効率的な推進と円滑な実施、特に重要度・緊急度の高い部門を支援するため、創成科学研究機構、触媒化学研究センター、先端科学技術共同研	

<p>い部門を支援するため、技術職員や事務職員を適正かつ柔軟に配置する。</p>	<p>い部門を支援するため、必要に応じて技術職員や事務職員を適正かつ柔軟に配置する。</p>	<p>究センター及び電子科学研究所附属ナノテクノロジー研究センターの事務を統合して「北キャンパス合同事務部」を設置し、事務職員を配置した。 また、技術職員に関する組織の在り方については、人事WGで、研究ニーズ等に応じて機動的に研究支援が実施できるシステムの在り方を検討するとともに、助手、技術職員、教務職員を含めた教育研究支援職員の在り方全体についても検討した。これらの検討に基づき、平成17年度中に、この問題に関する基本的な方向について、成案を得る予定である。</p>	
<p>研究資金の配分システムに関する具体的方策 ・ 研究者個人や小規模グループが推進する研究プロジェクトは、それぞれの研究者が外部資金として獲得した競争的研究費による実施を基本とするが、基礎的・基盤的研究領域で、外部資金の獲得が難しい初期段階の萌芽的研究等については、重要性や戦略性等を勘案しつつ、の1の「全学的視点からの戦略的な学内資源配分に関する具体的方策」に掲げるシステムを活用した研究資金の支援を行う。</p> <p>・ 本学の伝統と特色を生かした基礎的・応用的研究、地域・国際貢献に関する研究、世界的レベルの拠点形成研究、大学が主導すべき戦略的プロジェクト研究等については、その規模と重要度・緊急度を勘案しつつ、必要に応じて上記システムを活用した研究資金の支援を行う。</p> <p>・ 外部からの新任教員に対する支援促進制度（スタートアップ経費）を設ける。</p>	<p>研究資金の配分システムに関する具体的方策 ・ 研究者個人や小規模グループが推進する研究プロジェクトは、それぞれの研究者が外部資金として獲得した競争的研究費による実施を基本とするが、基礎的・基盤的研究領域で、外部資金の獲得が難しい初期段階の萌芽的研究等については、重要性や戦略性等を勘案しつつ、の1の「全学的視点からの戦略的な学内資源配分に関する具体的方策」に掲げるシステムを活用した研究資金の支援を行う。</p> <p>・ 本学の伝統と特色を生かした基礎的・応用的研究、地域・国際貢献に関する研究、世界的レベルの拠点形成研究、大学が主導すべき戦略的プロジェクト研究等については、その規模と重要度・緊急度を勘案しつつ、必要に応じて上記システムを活用した研究資金の支援を行う。</p> <p>・ 外部からの新任教員に対する支援促進制度（スタートアップ経費）について検討する。</p>	<p>・ 重点配分経費により、卓越した研究成果を上げることが期待できるプロジェクト（世界的レベルの戦略的プロジェクト）5件や学術研究上新たな取組を行っているプロジェクト（先端的融合学問領域創成につながる研究）4件に対して、公募を通じて資金の配分を行った。</p> <p>・ 重点配分経費により、世界的レベルの戦略的プロジェクト研究、先端的融合学問領域創成につながる研究、21世紀COEプログラム活動拠点報告会、産学連携推進会議の地域や企業との情報発信の推進経費、成果の社会への還元としての特許出願費等の支援を行った。 また、創成科学研究機構の研究活動を支援する経費として、特定研究3部門、流動研究11部門に対して重点配分経費を措置した。</p> <p>・ 企画・経営室において、過去2年間における外部からの新任教員の採用状況を調査するなどして、支援促進制度設計のための基礎データを整理し、分析した。</p>	
<p>研究に必要な設備等の活用・整備に関する具体的方策 ・ 高度な研究設備のより横断的効率的な利用を図るため、設備・機器等を全学的に供用しつる体制を整備拡充する。</p> <p>・ 大学主導の重点的研究プロジェクトの実施に必要な設備は学内共同利用設備として整備し、円滑な共同利用体制の構築を図る。</p> <p>・ 複合的・学際的な研究や共同研究実施に係る研究ネットワーク構築に資するため、札幌キャンパス以外の諸施設を含め大学全体として施設・設備の適切な整備を図る。</p>	<p>研究に必要な設備等の活用・整備に関する具体的方策 ・ 高度な研究設備のより横断的効率的な利用を図るため、設備・機器等を全学的に供用しつる体制について検討する。</p> <p>・ 大学主導の重点的研究プロジェクトの実施に必要な設備は学内共同利用設備として整備を図る。</p> <p>・ 複合的・学際的な研究や共同研究実施に係る研究ネットワーク構築に資するため、札幌キャンパス以外の諸施設を含め大学全体として施設・設備の適切な整備を図る。</p>	<p>・ 創成科学研究機構、触媒化学研究センター、電子科学研究所、電子科学研究所附属ナノテクノロジー研究センターで、オープンファシリティ及び電子科学研究所附属ナノテクノロジー研究センターのクリーンルーム等の新築建物を中心とした共同利用スペースを設け有効利用を図った。</p> <p>・ 平成16年度科学技術振興調整費及び特定経費でプロジェクト研究の実施に必要なために措置した設備については、学内共同利用設備として整備を図った。</p> <p>・ 札幌キャンパス以外の既存諸施設を効果的に利用する方策の一つとして、老朽化が進行し利用上の不備を生じていた北方生物圏フィールド科学センター苫小牧研究林森林資料館の再生整備改修を実施した。 また、水産学研究所及び北方生物圏フィールド科学センターの札幌キャンパス以外の施設・設備について、工事5件（7,666千円）備品5件（5,775千円）を整備した。</p>	
<p>知的財産の創出、取得、管理及び活用に関する具体的方策 ・ 知的財産の大学帰属の原則を徹底し、知的財産の管理、活用等に関する業務を行う組織を編成し、学内研究科、研究所等（以下「研究科等」という。）にある知的財産についての集積・一元管理体制を整備する。</p> <p>・ 研究成果の取扱及び知的財産</p>	<p>知的財産の創出、取得、管理及び活用に関する具体的方策 ・ 知的財産の大学帰属の原則を徹底し、知的財産の管理、活用等に関する業務を行うため、知的財産本部を整備し、学内研究科、研究所等（以下「研究科等」という。）にある知的財産についての集積・一元管理体制を整備する。</p> <p>・ 研究成果の取扱及び知的財産</p>	<p>・ 「国立大学法人北海道大学職務発明規程」を制定し、大学で創出された知的財産の権利は、原則機関帰属とし、平成15年10月に設置した知的財産本部において一元的管理を行うとともに、知的財産審査会を設置し、出願の可否、活用について審査する体制を整えた。 また、学内の知的財産の発掘を行うため、知的財産マネージャーの他にリサーチャーを配置し、知的財産の発掘を図った。 発明等の届出をインターネットを活用して行うことで、出願までの迅速性の確保を図った。</p> <p>・ 大学の社会的貢献として、知的財産を社会へ還元するため、知的財産ポリ</p>	

<p>の管理・活用に関する「知的財産ポリシー」等を整備するとともに、「利益相反」のマネジメント等について「利益相反ポリシー」を整備し、その普及を図る。</p>	<p>の管理・活用に関する「知的財産ポリシー」等を整備するとともに、「利益相反」のマネジメント等について「利益相反ポリシー」を検討する。</p>	<p>シー、産学連携ポリシー及び利益相反ポリシーを定め、大学の基本的な考え方を明確に示すとともに、透明性を確保するため、利益相反マネジメント体制の整備を図った。</p>
<ul style="list-style-type: none"> 知的財産の創出、取得、活用の一層の促進を図るため、セミナー等を通じて広く知的財産に関する啓発を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 知的財産の創出、取得、活用の一層の促進を図るため、セミナー等を通じて広く知的財産に関する啓発を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 職務説明制度について教員等の理解を深めるため、部局での説明会（7部局）の開催、知的財産を活用するためのセミナー（4回・250名）及び産学連携を推進させるため契約交渉能力を高めるセミナー（1回・100名）等を開催し、啓発活動を積極的に行った。
<ul style="list-style-type: none"> 広報活動やデータベースの整備により知的財産に関する情報の発信を進め、企業等との連携により、知的財産の活用を積極的に推し進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 知的財産に関する広報活動やデータベースの整備を図るとともに、企業等との連携により、知的財産の活用を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 知的財産本部活動のPRのためのニュースレター、パンフレットの発行及びホームページの開設により、産学連携のための情報発信を積極的に行うとともに全国規模の展示会に参加し、本学の知的財産の活用を推進した。 また、特許管理システムを導入し、知的財産の一元的管理、活用体制を整えた。
<p>研究活動の評価および評価結果を質の向上につなげるための具体的な方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 各研究組織において、前記（1）の「研究の水準・成果の検証に関する具体的方策」に掲げるものを含め、組織としての研究活動及び個々の研究者による研究活動を評価する体制並びに評価結果を研究活動の質の向上及び改善の取組に結び付ける体制を確立する。 	<p>研究活動の評価および評価結果を質の向上につなげるための具体的な方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 各研究組織において、前記（1）の「研究の水準・成果の検証に関する具体的方策」に掲げるものを含め、組織としての研究活動及び個々の研究者による研究活動を評価する体制を整備するとともに、評価結果を研究活動の質の向上及び改善の取組に結び付ける体制の整備に着手する。 	<ul style="list-style-type: none"> 国立大学法人北海道大学評価規程において本学における評価の基本的事項を定め、評価室を設置するとともに、各部局等を点検及び評価を行う「実施部局」とし、部局評価組織を置くこととした。各部局等においては、同規程に基づき内規を定め、部局評価組織を設置した。また、評価室において、本学における評価の概要や評価室と各総長室・各部局等の役割分担等の全学的方針を取りまとめ各部局等に周知した。 なお、評価結果を各部局等が把握し、研究活動の質の向上及び改善等の取組に結び付けるシステムの一環として、平成4年度から毎年作成している「研究活動一覧」について、昨年までは全学的組織である点検評価委員会で掲載業績の点検・審査を実施していたが、本年度からは各部局等が所属する教員等の業績について実施することとした。
<ul style="list-style-type: none"> 研究目標、研究計画、研究体制管理、投入研究資源、研究成果等につき客観的・多面的な評価項目を設定するなど研究活動の評価を行うに当たって公正中立を期すための方策を検討し、平成17年度中を目標に成案を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究目標、研究計画、研究体制管理、投入研究資源、研究成果等につき客観的・多面的な評価項目を設定するなど研究活動の評価を行うに当たって公正中立を期すための方策について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 評価室において、研究活動の評価を行うに当たって公正中立を期すための方策について、その検討項目、留意事項等の論点を整理し、検討に着手した。法人評価の研究水準評価の検討状況等も勘案しつつ、本論点整理を基に検討し、平成17年度中に成案を得ることとしている。
<p>全国共同研究、学内共同研究等に関する具体的な方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 学内の全国共同利用の附置研究所・全国共同利用施設を中心として、他大学等との連携による効果的な共同研究を推進し、全国に開かれた研究拠点としての地位のより一層の向上を図る。 	<p>全国共同研究、学内共同研究等に関する具体的な方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 学内の全国共同利用の附置研究所・全国共同利用施設を中心として、他大学等との連携による効果的な共同研究を推進し、全国に開かれた研究拠点としての地位のより一層の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学内における全国共同利用の附置研究所・全国共同利用施設においては、その特色を最大限に生かせるよう配慮し、附置研究所においては低温科学研究所に環オホーツク研究センターを設置し、全国規模の共同研究やシンポジウムを行ったことをはじめ、以下に述べる各センター等における他大学等の研究者対象の「共同研究員制度」、国立7大学サイバーユニバーシティ委員会の共同研究参加、最先端で活躍する他大学教員を客員として招いた大学間共同研究・技術交流、産学官共同研究推進のための総合窓口機能や、21世紀COEプログラムをはじめとしたプロジェクト研究における他大学・全国の研究者の参加を積極的に促し、研究拠点としての地位向上を図った。
<ul style="list-style-type: none"> 本学における特色ある研究を推進するため、既存学問分野のさらなる発展と深化の促進並びに異分野の融合による新しい研究の芽生えを誘導することを目指し、重要度・緊急度に応じた大規模共同研究を戦略的に推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本学における特色ある研究を推進するため、既存学問分野のさらなる発展と深化の促進並びに異分野の融合による新しい研究の芽生えを誘導することを目指し、重要度・緊急度に応じた大規模共同研究を戦略的に推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 札幌農学校以来本学が蓄積してきた「博物学」分野の業績を集大成し、地球科学と生物分類学関連の研究者団が結集して、平成15年度21世紀COEプログラム「新・自然史科学創成」が採択された。ここでは、地質学、地球化学、地球物理学といった旧来の枠組みを解き放ち、これらの最新の成果を統合した新たな自然史の科学の創成を目指している。
<ul style="list-style-type: none"> 触媒化学に関する研究、情報の発信及び交流拠点としての活動を推進し、この分野における全国共同研究を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 触媒化学研究センターは、触媒化学に関する研究、情報の発信及び交流拠点としての活動を推進し、この分野における全国共同研究を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 触媒化学研究センターにおいては、国内における情報発信・交流拠点として、「国際研究集会（シンポジウム）」「研究討論会」「研究発表会」の3事業を実施し、海外の交流拠点としてアジアでは中国、ヨーロッパではドイツを中心に拠点形成を行った。 また、他大学等の研究者が同センターの教員と触媒化学に関する研究課題について共同研究を推進するための「共同研究員制度」を設けており、平成16年度は95件の共同研究を行った。
<ul style="list-style-type: none"> スラブ・ユーラシア地域に関する総合研究を推進するとともに 	<ul style="list-style-type: none"> スラブ研究センターは、スラブ・ユーラシア地域に関する総合 	<ul style="list-style-type: none"> スラブ研究センターにおいては、21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学」の構築：中域圏の形成と地球化」を中心に総合研究を推進した。

<p>に、この分野における全国及び国際共同研究を実施する。</p>	<p>合研究を推進するとともに、この分野における全国及び国際共同研究を実施する。</p>	<p>このプロジェクトの下で20件近くの共同研究を進め、これには全国の研究者が参加しており、全国規模の共同研究として推進した。 また、国際共同研究も「ポスト冷戦時代のロシア・中国関係とそのアジア諸地域への影響」、「東欧の地域社会形成と拡大EUの相互的影響に関する研究」等を実施した。</p>
<p>・ 全国共同利用設備を含む情報基盤を整備し、情報化を推進する研究開発並びに情報メディアを活用した研究教育の実施及び支援を行う。</p>	<p>・ 情報基盤センターは、全国共同利用設備を含む情報基盤を整備し、情報化を推進する研究開発並びに情報メディアを活用した研究教育の実施及び支援を行う。</p>	<p>・ 情報基盤センターにおいては、スーパーコンピュータの演算付加サービスを拡大するとともに、バルク利用制度を新たに開始した。また、利用者からの要望に応じスーパーコンピュータで利用可能なライブラリ等を整備した。さらに、教育用計算機システムを更新した。 研究面では、スーパーコンピュータを用いた大規模シミュレーション研究やグリッドコンピューティング研究を推進した。 教育面では国立7大学サイバーユニバーシティ委員会の共同研究に参加し、外国語教育のe-ラーニング化推進を支援した。</p>
<p>・ アイソトープを利用する研究教育において共同利用施設の活用を図る。</p>	<p>・ アイソトープ総合センターは、アイソトープを利用する研究教育において共同利用施設の活用を図る。</p>	<p>・ アイソトープ総合センターにおいては、理学研究科、医学研究科、大学病院、薬学研究科、遺伝子病制御研究所等がアイソトープを利用する研究教育を行い、さらに他大学の利用も受け入れた。 また、利用者に対する教育訓練のほか、学生実習、安全講習会の企画、実習等を行った。</p>
<p>・ 分析機器を利用する研究教育において共同利用施設の活用を図る。</p>	<p>・ 機器分析センターは、分析機器を利用する研究教育において共同利用施設の活用を図る。</p>	<p>・ 機器分析センターにおいては、各部局より元素分析、質量分析、核磁気共鳴分析、アミノ酸組成分析及び蛋白質配列分析の委託を受け、分析装置に専任のオペレータを配して、高精度な分析データを提供した。平成16年度の実績は17部局から約10,000件あった。</p>
<p>・ 高機能エネルギーマテリアルの開発基盤を構築するため、共同利用施設を整備する。</p>	<p>・ 高機能エネルギーマテリアルの開発基盤を構築するため、共同利用施設として、エネルギー変換マテリアル研究センターを整備する。</p>	<p>・ エネルギー変換マテリアル研究センターにおいては、各種既存のエネルギー資源の有効利用と新エネルギー源の高効率化と開発基礎を構築するためのエネルギー転換技術に関連するエネルギー変換マテリアル研究を推進しており、特に、最先端で活躍している他大学の教授、助教授を客員として招き、大学間の共同研究・技術交流を積極的に展開した。 また、日本人4名と外国人2名の非常勤研究員を採用し、若手研究者による活発な研究活動を展開した。</p>
<p>・ 基礎的・学際的研究から応用、開発及び実用に至る研究並びにこれらの研究支援を行い、本学と産業界等との研究協力を推進する。</p>	<p>・ 先端科学技術共同研究センターは、基礎的・学際的研究から応用、開発及び実用に至る研究並びにこれらの研究支援を行い、本学と産業界等との研究協力を推進する。</p>	<p>・ 先端科学技術共同研究センターにおいては、動物染色体研究を中心とした基礎研究から産学連携を目指した応用研究まで、積極的に取り組んだ。 また、学外に対する総合窓口機能と産学官共同研究を推進し、中でも、プロジェクト研究領域は学内での産学連携研究の中から特に事業化の可能性の大きな研究を公募し、新規事業創出やベンチャー企業の立ち上げを全面に打ち出したプロジェクト研究を行っており、平成16年度は6件の共同研究プロジェクトが採択され、継続の6件と合わせて12件のプロジェクトが実施された。</p>
<p>・ 量子集積エレクトロニクスに関する研究を推進する。</p>	<p>・ 量子集積エレクトロニクス研究センターは、量子集積エレクトロニクスに関する研究を推進する。</p>	<p>・ 量子集積エレクトロニクス研究センターにおいては、次世代高度情報化社会ハードウェア技術の要請に突破口を開くため、量子力学を原理とする全く新しい「量子集積エレクトロニクス」を創り出し、ユビキタスネットワーク社会の発展のキーとなる大規模情報・通信集積システムやナノテクノロジー発展のキーとなる超微細電子・光システムを構築する研究を推進した。</p>
<p>・ 北方生物圏におけるフィールドを基盤とした総合的な研究教育を推進する。</p>	<p>・ 北方生物圏フィールド科学センターは、生物圏におけるフィールドを基盤とした総合的な研究教育を推進する。</p>	<p>・ 北方生物圏フィールド科学センターにおいては、学内・全国の研究者や研究機関との共同研究を推進しており、平成16年度は、三菱重工業(株)や国立環境研究所などと10件以上の共同研究を実施した。 また、同センターにおいてプロジェクト研究を企画し、積極的な提案と組織作りを行うことや、センター外から提案されたプロジェクト研究に積極的に参画することにより、センター以外のフィールドで実施される共同研究の組織化・拡大を進めた(約20件)。</p>
<p>・ ベンチャー・ビジネスの萌芽となる独創的な研究開発を推進するとともに、高度の専門的職業能力を持つ創造的な人材を育成する。</p>	<p>・ ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーは、ベンチャー・ビジネスの萌芽となる独創的な研究開発を推進するとともに、高度の専門的職業能力を持つ創造的な人材を育成する。</p>	<p>・ ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーにおいては、ベンチャーシーズの萌芽となる独創的な研究を進め、各種技術を開発した。また、これらの研究成果をベースに、東芝、NTTドコモ、K-plex(米国)、Intel Ipaxx(独)、シーズラボとの共同研究を開始した。 さらに、創造的な人材の育成を促進するため、外国企業との合同研究集会に大学院学生を参加させたり、共同研究に大学院学生をメンバーとして加えるなど積極的に人材育成を行った。</p>
<p>・ 新たな学問領域の創成及び研究科等横断的な研究を推進する。</p>	<p>・ 創成科学研究機構は、新たな学問領域の創成及び研究科等横断的な研究を推進する。</p>	<p>・ 創成科学研究機構においては、部局横断的な研究推進体制の確立、超学問領域研究の創成、文系・理系にとられない学術の社会還元等を目指し、学内及び国内外との共同研究を推進するため、研究企画室等の推進体制を構築して専門家を配置し、平成16年度は、包括連携協定に基づく共同研究10件を</p>

<p>学部・研究科・附置研究所等の研究実施体制等に関する特記事項</p> <ul style="list-style-type: none"> 高度情報化社会に対応するために既存の関連学問分野を統合した「情報科学」を担う研究教育組織を確立し、発展させる。 	<p>学部・研究科・附置研究所等の研究実施体制等に関する特記事項</p> <ul style="list-style-type: none"> 高度情報化社会に対応するために既存の関連学問分野を統合した「情報科学」を担う研究教育組織として情報科学研究科を設置し、体制を整備する。 	<p>実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 工学研究科のシステム情報工学専攻、電子情報工学専攻並びに電子科学研究科の各々の関連分野の改組再編により、平成16年4月1日に「情報科学研究科（6専攻）」を設置し、修士課程、博士後期課程を同時に開設した。同研究科には、電子科学研究所、量子集積エレクトロニクス研究センター及び情報基盤センターから協力講座を配置し、充実した教育研究の体制整備を進めた。 	
<ul style="list-style-type: none"> ジェンダーに関する研究教育、及びアイヌ民族をはじめとする北方諸民族に関する研究教育を総合的に推進する体制の構築を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ジェンダーに関する研究教育、及びアイヌ民族をはじめとする北方諸民族に関する研究教育を総合的に推進する体制の構築について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学全体として、男女共同参画推進のための姿勢と方針を明確に表明し、組織的に事業を展開するため、全学委員会として男女共同参画委員会を設置し、同委員会の検討事項の一つとして、ジェンダーに関する研究教育を推進する体制の構築に関する事項を定めた。なお、事業を専門的見地から具体的に推進するため、同委員会の下に企画調査専門委員会を設置した。また、アイヌを含む北方諸民族に関する研究教育を総合的に推進する体制の構築について検討するため、企画・経営室の下に「北方諸民族研究教育体制整備に関するWG」を設置し、専門的見地からこれまでの経緯等を再検討し、平成17年度以降に取り組むべき課題の整理を行った。 	
<ul style="list-style-type: none"> 文理融合型の研究教育を適切に推進する体制の構築を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 文理融合型の研究教育を適切に推進する体制の構築について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成15年9月開催の評議会において了承された「文理融合の教育研究に関する推進方策について」に基づき、文理融合型の研究教育を適切に推進する体制として、公共政策に関する専門職大学院を設置するため、「公共政策大学院設置準備委員会」において、「公共政策学教育部」「公共政策学連携研究部」の設置計画を策定した。なお、「公共政策学教育部」の設置計画（平成17年4月設置）については、文部科学省大学設置・学校法人審議会における審査を経て、文部科学大臣から設置を認められた。 	

大学の教育研究等の質の向上
 3 その他の目標
 (1) 社会との連携、国際交流等に関する目標

中期目標 社会連携、産学官連携、国際交流を実施する体制及び環境を整備し、関連事業を推進することにより、世界水準の研究を促進するとともに、教育研究成果の産業界、地域社会及び国際社会への還元を積極的に進める。

中期計画	年度計画	計画の進行状況等	
<p>地域社会等との連携・協力、社会サービス等に係る具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会連携に関する情報発信機能を充実させるため、ホームページ活用の一層の推進を図るとともに、特に本学における研究者及び研究活動情報についてはそれらのデータベース化を進め、その公開・共用により、地域社会、産業界との交流の強化を図る。 	<p>地域社会等との連携・協力、社会サービス等に係る具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会連携に関する情報発信機能を充実させるため、ホームページ活用の一層の推進を図るとともに、特に本学における研究者及び研究活動情報についてはそれらのデータベース化を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 包括連携協定の状況をホームページに掲載し、地域社会への情報発信を充実させた。また、国際競争力が求められている状況の中で、英語による情報発信をより一層強化、推進するために、研究者及び研究業績等のデータベースの英語版を作成し、平成16年度から各研究者による入力を開始した。 	
<ul style="list-style-type: none"> 国・地方自治体、経済・文化団体、非営利団体等を含む地域社会の行政、文化、産業活動等への貢献のため、各種審議会、委員会、研究会への参加等を含め、それらを専門的見地から評価、助言する活動を拡充する。また、行政、文化、産業、教育、福祉、医療等の様々な分野において活躍中の専門職業人等を対象とした講演会、講習会活動をより充実させるとともに、本学の様々な制度を活用したりカレント教育を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 国・地方自治体、経済・文化団体、非営利団体等を含む地域社会の行政、文化、産業活動等への貢献のため、各種審議会、委員会、研究会への参加等を含め、それらを専門的見地から評価、助言する活動を推進する。また、行政、文化、産業、教育、福祉、医療等の様々な分野において活躍中の専門職業人等を対象とした講演会、講習会活動をより充実させるとともに、本学の様々な制度を活用したりカレント教育を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年度、各種審議会、委員会等へは、1,084名が延べ1,908件（国207名、299件、地方自治体366名、702件、各種団体511名、907件）に参加した。各部局においては、経済学研究科のセミナー「北海道における新しい企業経営の在り方を考える」、薬学研究科の「薬局・病院薬剤師指導者研修会」等、専門職業人を対象とした講演会等を36件開催した。 また、本学の制度を利用して、学部にあつては聴講生24名、科目等履修生88名、研究生216名、特別聴講生69名、大学院にあつては聴講生10名、科目等履修生34名、研究生421名、特別聴講生20名、特別研究生29名（人数は前・後期の延べ人数）に対して教育を行った。 	
<ul style="list-style-type: none"> 地域の社会人教育等を推進するため、公開講座や市民を対象とした教育活動、施設利用等を通じ、基幹総合大学の特色を發揮した、潜在的知的好奇心を満足させようとする社会教育サービス事業を企画・実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の社会人教育等を推進するため、公開講座や市民を対象とした教育活動、施設利用等を通じ、基幹総合大学の特色を發揮した、潜在的知的好奇心を満足させようとする社会教育サービス事業を企画・実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 公開講座（講習料を徴収するもの）は、全学企画で1講座、部局企画で14講座実施し、525名の受講者があった。またリカレント教育特別事業として薬学部生涯教育特別講座を実施した。また、部局長が講師となり市民等との対話により進められる「遠友学舎炉辺談話」など知的好奇心に応えるユニークな取組も行った。 各部局においても、専門職業人等を対象とした講演会等36件、その他の市民を対象とした教育活動として歯学部の市民公開特別講座や北方生物圏フィールド科学センターの自然観察会等33件の教育サービスが実施された。総合博物館では「土曜市民セミナー」を実施するとともに、種々の講演会等を行った。 	
<ul style="list-style-type: none"> オープンキャンパス事業、出前講義、学部講義への受入及び公開講演活動等を通じた初等・中等教育との連携を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> オープンキャンパス事業、出前講義、学部講義への受入及び公開講演活動等を通じた初等・中等教育との連携を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> アドミッション・センターが中心となり、オープンユニバーシティを札幌キャンパスと函館キャンパスで開催し、高校生を中心に3,100名の参加があった。また、体験入学を全12学部で実施し高校生の1,024名の参加があった。これらの活動に加え、道内31校、道外3校の高等学校を訪問し出前講義や進路指導担当教諭との情報交換を行った。小中学生を対象にした事業は、水産科学研究科、北方生物圏フィールド科学センター等において大学等開放推進事業大学ジュニアサイエンス教室を実施した（10件）。このほかに「総合学習」などでの研究室訪問などを学部や教員独自に受け入れた。学部講義への受入れについては、「高大連携科目についての研究会」（入学者選抜企画研究部・生涯学習計画研究部）の研究活動の一環として計画し、札幌旭丘高校から10名の聴講者を全学教育の7科目で受け入れた。その他、情報基盤センターが高校生を対象とする授業をe-ラーニングシステム等も活用して実施した（聴講者20名）。 	

<ul style="list-style-type: none"> 地方自治体等の生涯学習計画の企画・立案・各種相談並びに交流事業等に積極的に参加し、地域社会の文化的活性化に貢献する。 本学学部卒業者、大学院修了者の各同窓会組織の連絡・協力体制の整備を支援し、本学の研究、教育・社会連携等に関する意見交換を広く行いうる体制の構築を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地方自治体等の生涯学習計画の企画・立案・各種相談並びに交流事業等に積極的に参加し、地域社会の文化的活性化に貢献する。 本学学部卒業者、大学院修了者の各同窓会組織の連絡・協力体制の整備を支援し、本学の研究、教育・社会連携等に関する意見交換を広く行いうる体制の構築を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 北海道生涯学習審議会への委員としての参加、北海道が実施する「道民カレッジ」への運営委員長、専門部会委員としての参加、札幌市への社会教育委員としての参加、札幌市が実施する「さっぽろ市民カレッジ」への企画委員会委員長としての参加などにより地方自治体の生涯学習計画の企画立案に参画した。また、高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部では、北海道や道内の社会教育主事会が実施した市町村の生涯学習計画策定担当者の研修への講師の派遣（6件）のみならず、道内の生涯学習行政担当者から寄せられる相談等に適宜対応した。 平成16年4月に、学部同窓会及び地区同窓会を束ねる組織として「北海道大学連合同窓会」を結成した。同連合同窓会の運営に当たっては、代表幹事及び幹事として本学役員が参画するほか、本学が事務局を担当するなど、本学と直結した社会との玄関口と位置付けた。平成16年度は、同連合同窓会の加入同窓会数を増やして組織固めを行うと共に、本学が東京で開催した21世紀COE拠点活動報告会の後援、本学キャリアセンターとの共催による企業等研究セミナー（就職説明会）の開催等を実施した。
<ul style="list-style-type: none"> 産学官連携の推進に関する具体的方策 大学と産業界を結ぶリエゾン機能を一層強化するため、リエゾンオフィス体制の整備を進めるとともに、学内の連絡調整機能を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 産学官連携の推進に関する具体的方策 大学と産業界を結ぶリエゾン機能を一層強化するため、リエゾンオフィス体制を整備するとともに、学内の連絡調整機能を充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 先端科学技術共同研究センターにリエゾンオフィスを置き、本学の研究シーズとマッチングを図ると同時に、地域における産業技術戦略の設定、産学連携研究実践のサポートを行っている。平成16年度においては、客員教授3名を招へいし、地域のみならず企業ニーズの収集に努め、産業技術の創出を目指した総合的リエゾン活動を展開した。また、北海道から共同研究員1名を受け入れ、リエゾン活動への参画を得て、公設研究機関との連携強化を図った。さらには旧事務室を全面リニューアルし、学内外からの研究（技術）相談に対応できるよう整備した。 なお、平成17年4月から先端科学技術共同研究センターと創成科学研究機構を統合し、「リエゾンオフィス」を充実、発展させて「リエゾンセンター」として、研究成果の活用に関する総合窓口、地域連携、包括連携の推進と具体的な活動に関する企画・立案、起業人材育成の推進とビジネス創造支援、高度技術研修等の大学事業の企画・立案・実施を行うべく、平成16年度にその準備を行った。
<ul style="list-style-type: none"> 産学官の連携・協力機能が集積された札幌北キャンパスにおいて、関連する研究所等のほか、産学連携施設、民間資金活用関連施設の整備を図り、交流のさらなる活性化を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 産学官の連携・協力機能が集積された札幌北キャンパスにおいて、関連する研究所等のほか、産学連携施設、民間資金活用関連施設の整備を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 創成科学研究機構、次世代ポストゲノム研究棟、道立試験研究機関等多くの研究機関が集積する北キャンパスエリアにおいて、研究開発から事業化までの一貫したシステムを構築し、新事業・新産業を創出することにより、地域経済活性化を目的として、産学官の連携の下に「北大リサーチ&ビジネスパーク構想（以下R&BP構想）」を推進している。 この構想実現に向けては、北大、北海道、札幌市、北海道経済連合会、北海道経済産業局等11機関が「北大R&BP構想推進協議会」を設置して具体的な方策を検討している。 平成16年度は、R&BP構想推進のために必要な研究環境と、その整備方策について調査・検討を行い、次段階のR&BP構想推進の戦略検討基礎資料とするために、「産学官共同研究基盤調査」を実施した。 また、札幌中心部に、道内の大学、道立試験研究機関等が一堂に会する研究・技術開発交流及び技術相談の場とするために開設された「R&BPパーク札幌大通サテライト」の設置準備には本学も積極的に参画した。 さらに産学官の連携をより推進するために、平成17年度に本学に産学官連携事業推進室を設置する準備を行った。
<ul style="list-style-type: none"> 技術相談会及び交流セミナー等の開催を積極的に進めるとともに、学内の研究施設・装置の活用方法を整備し、共同研究や受託研究をさらに推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 技術相談会及び交流セミナー等の開催を推進するとともに、学内の研究施設・装置の活用方法の整備の検討を開始し、共同研究や受託研究を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 先端科学技術共同研究センターにおいては、企業ニーズと学内シーズのマッチングを図るため、産学官連携研究会（「HoPE」）主催の交流セミナーの開催に協力するとともに、企業からの技術相談を随時受け付け、年間200件の問い合わせに対応した。また、学内での産学連携研究のうち特に事業化の可能性が大きい研究テーマ12件をプロジェクト研究として採択し、企業との連携研究を支援した。 学内の研究施設・装置の活用方法の整備については、R&BP構想推進の事業の一環として実施した「産学官共同研究基盤調査」のうちの「機器・機材、外部研究者の利用の可能性」の調査結果に基づき、北キャンパスエリアの研究機関の装置等を整理し、活用方法の整備について検討を行った。
<ul style="list-style-type: none"> 寄附講座の設置により研究・教育両面での産学連携を推進するとともに、学外機関研究員の受入体制を整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> 寄附講座の設置により研究・教育両面での産学連携を推進するとともに、学外機関研究員の受入体制の整備について検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 寄附講座として、新規に4講座（創薬薬理学講座、地中熱利用システム工学講座、機能解析学講座、マトリックスメディスン研究部門）を設置し、1講座（遺伝子治療講座）を更新した。 また、学外の機関からの研究員受入れ拡大のため、顕著な教育研究上の業績を有する研究者等が本学において報酬を受けずに教育研究活動を行うことができるよう「北海道大学招へい教員規程」を制定した。
<ul style="list-style-type: none"> 地方自治体・企業と連携し、社会のニーズに対応した研究プロジェクト等について札幌北キ 	<ul style="list-style-type: none"> 地方自治体・企業と連携し、社会のニーズに対応した研究プロジェクト等について札幌北キ 	<ul style="list-style-type: none"> 「R&BP構想推進協議会」では、IT・バイオなどの先端技術分野において事業展開を図る道内企業などを対象に、北キャンパスの研究スペース・施設をインキュベーション施設として活用することとし、支援対象者を公募

<p>キャンパスの研究スペース・施設を活用し、研究開発から事業化・育成を行う体制の構築を進め、技術移転及び起業促進を図るよう努める。</p>	<p>キャンパスの研究スペース・施設を活用し、研究開発から事業化・育成を行う体制の構築を推進する。</p>	<p>した。この事業に採択された企業等に対し、本学として共同研究や受託研究を実施したほか、技術相談や技術指導を行い、事業推進のサポートを行った。 ・北海道と本学の協働型研究を推進する「協働型開発事業 - 地域COEの形成 -」が平成17年度特別教育研究経費連携融合事業として採択された。 平成17年4月からの事業開始に向け、2つの協働型研究「細胞制御機能バイオミネテック材料の開発と高度先進医用工学への応用に関する研究」及び「ユビキタス・コンピューティングを導入した次世代型産業支援装置群の開発」について、北海道と連絡調整を行った。</p>
<p>産学官連携の拠点としての「北海道大学東京オフィス」の機能強化を図るとともに、海外における研究機関・大学や企業等との連携活動拠点の形成に努める。</p>	<p>産学官連携の拠点としての「北海道大学東京オフィス」の機能強化を図るとともに、海外における研究機関・大学や企業等との連携活動拠点の形成に向けた検討を行う。</p>	<p>東京オフィスに、非常勤職員を採用し、「オフィス代表(産学官連携担当)」の称号を付与し、各省庁や民間企業の連絡調整に当たらせ、関東地方における産学官連携等に関する業務の機能強化を図った。 また、国際交流室において、中国諸大学の研究者交流、学生交流の促進等を目的としたオフィスを北京に設置することの検討を行った。11月には役員補佐が北京に赴き、他機関等の既設オフィスを視察した。この報告に基づき、国際交流室において、中国科学院文献センター内へのオフィス設置案を策定し、役員会、教育研究評議会の了承を得て、平成17年度前半の開設を目的に準備を進めた。</p>
<p>留学生交流その他諸外国の大学等との教育研究上の交流に関する具体的方策 ・国際交流の企画立案にあたる組織を平成16年度から設置し、国際交流の活性化を図る。</p>	<p>留学生交流その他諸外国の大学等との教育研究上の交流に関する具体的方策 ・国際交流の企画立案にあたる国際交流室を設置し、国際交流の活性化のための体制を整備する。</p>	<p>外国の大学との交流等を企画立案するため、平成16年4月に国際交流室を設置した。国際交流室は国際交流担当の理事(副学長)を室長とし、理事(事務局長)、役員補佐2、教員4、学術国際部長で構成し、本学の北東アジア戦略、国際協力銀行(JIBC)円借款中国内陸部人材育成事業による研修員受入れ、国際協力機構(JICA)との連携協力、留学生の派遣・受入れ拡大方策などを企画立案した。</p>
<p>国際交流の在り方等について海外大学等の有識者による外部評価や意見交換等を実施する。</p>	<p>国際交流の在り方等について海外大学等の有識者による外部評価や意見交換等の実施について検討する。</p>	<p>海外大学等の有識者による意見交換等については、新たに刊行した英語版「ニュースレター」及び国際的に著名な鈴木章名誉教授の英文の研究業績集の海外発信を通して拡充・深耕した多くの専門家とのコンタクトの機会並びに協定校の来学の機会等を捉えて行った。それらのことから幅広い意見を聴取して、平成17年度以降に有識者を招へいすることを含め、具体的方策を検討することとした。</p>
<p>大学間の交流協定の増加を図る一方、現在締結している協定については交流内容及び交流実績により見直しを行い、国際交流を量的にも質的にも向上させる。</p>	<p>大学間の交流協定の増加を図る一方、現在締結している協定については国際交流室において交流内容及び交流実績による見直しを行う。特に、中国をはじめとするアジア諸国、北方圏及びオセアニア諸国との交流の向上を図る。</p>	<p>大学間交流の協定校数については、平成15年5月現在の31校から平成16年5月現在の34校に増加した。国際交流室においては、部局が締結していた4大学7学部との部局間交流協定の見直しを行い、交流実績、今後の交流計画等を審査した上で、この4大学との間で学術及び学生交流に関する大学間交流協定を締結した。また、平成13年及び平成15年に締結した大学間交流協定に基づき、2大学と新たに学生交流覚書を締結した。 ・さらに、8月に北京で開催された日中学長会議後、北京大学、復旦大学及び吉林大学と個別ミーティングを行い、新規留学生の派遣、OBネットワーク(同窓会)の組織について協力を依頼した。また、平成17年3月に本学及び知床において開催したオークランド大学との合同シンポジウムを契機に、事務職員1名を3ヶ月間、語学研修を兼ねて同大学へ派遣した。</p>
<p>交流協定を締結した大学との間において、相互の交流拠点形成の実現に向けた計画を整備する。</p>	<p>交流協定を締結した大学との間において、相互の交流拠点形成の実現に向けた計画を検討する。</p>	<p>韓国ソウル大学とは、平成10年から交互に合同シンポジウムを開催しており、学術交流拠点としての実績を積み重ねてきた。国際交流室において、中国諸大学の研究者、学生交流の促進等を目的としたオフィスを北京に設置することの検討を行い、11月には役員補佐が北京に赴き、他機関等の既設オフィスを視察した。この報告に基づき、国際交流室において、中国科学院文献センター内へのオフィス設置案を策定し、役員会、教育研究評議会の了承を得て、平成17年度前半の開設を目的に準備を進めた。 また、触媒化学研究センターでは、日中双方の触媒化学関係研究者の交流、共同研究の推進、情報発信及び収集を目的とした北京大学化学学院との相互オフィス設置について平成15年5月に合意を得て、平成16年7月同時オープンさせた。</p>
<p>留学生双方向交流の拡大に向け、大学間の学生交流に関する覚書の増加や単位互換制度の充実に努める。</p>	<p>留学生双方向交流の拡大に向け、大学間の学生交流に関する覚書の増加や単位互換制度の充実に努める。</p>	<p>平成16年4月現在で、8カ国 21大学・2大学連合だった大学間協定大学が、平成17年3月現在で、11カ国 27大学・2大学連合に拡大した。具体的には、平成16年8月に中国・復旦大学、9月に同吉林大学、11月にハンガリー共和国・ブダペスト工科大学、12月にニュージーランド・オークランド大学、平成17年1月にロシア・モスクワ大学、3月に中華民国・国立台湾大学と学生交流覚書を締結した。 留学予定者及び潜在的な留学希望者の増加に伴い、単位互換の充実は重要となっており、互換単位数の拡大に向け既に実施している法学部・経済学部等のノウハウの学内での共有化を図った。</p>
<p>交流基盤拡大のため、外国人研究者招聘、教員の在外研究、</p>	<p>交流基盤拡大のため、外国人研究者招聘、事務・技術職員の</p>	<p>国際交流室において、国際交流活性化のため、重点配分経費により協定校との交流促進(国際シンポジウム、招へい・派遣等)、国際開発協力促進及</p>

<p>事務・技術職員の海外研修等を推進する。</p>	<p>海外研修及び教員の在外研究の推進方策について検討する。</p>	<p>び事務職員の海外研修等の方策を検討し、大学間交流協定校とのシンポジウム（2件）を開催したほか、31名の研究者を招聘し、55名の教員、学生等を派遣した。 また、8月には国立大学法人に関する情報収集・意見交換、10月には事務研修及び諸施設見学のため協定校から教員、事務職員を受け入れ、さらに、平成17年3月には、本学教員及び事務職員4名を協定校に派遣し、事務職員・学生の交流促進、産学官連携強化に関する意見交換を行うなど、学術交流以外の交流を活発に行った。</p>
<p>教育研究活動に関連した国際貢献に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際援助機関等による各種共同研究、国際共同開発プロジェクトの獲得・実行を支援するための学内体制を整備する。 国際開発協力実施のための学内基盤醸成及び人材育成を図るため、関連実務経験者によるセミナー、国内外の開発援助機関による研修会等の機会を確保する。 	<p>教育研究活動に関連した国際貢献に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際援助機関等による各種共同研究、国際共同開発プロジェクトの獲得・実行を支援するための学内体制の整備について検討する。また、専門家の派遣を推進するとともに、研修員の受入を促進する。 国際開発協力実施のための学内基盤醸成及び人材育成を図るため、関連実務経験者によるセミナー、国内外の開発援助機関による研修会等の機会を確保する。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際交流室において、J B I C 円借款中国内陸部人材育成事業による研修員受入れについて検討し、11月には、西安において行われた同事業ワークショップに教員及び事務職員の2名を参加させ、本学のPRを行うとともに、受入れについての説明を行った。さらに、円借款中国内陸部人材育成事業研修員について、教育研究評議会、役員会の了承を得て受入体制の整備を行うとともに、中国側の研修希望に応じ特設研修コースの開発を提案した。 また、J I C A 研修員の受入れ、専門家及び調査団員の派遣等、J I C A との連携協力を検討し、教育研究評議会、役員会の了承を得て平成17年4月に連携協力協定を締結した。 国際開発協力促進を図るため、平成16年6月J I C A 札幌国際センターの担当者を招致し、法人化に伴う専門家派遣手続きの変更、技術協力プロジェクト、草の根技術協力事業、インターンシッププログラムへの学生参加例など、大学と密接に関係するJ I C A 事業についての説明会を開催し、約50名の教職員・学生が参加した。平成17年2月には、文部科学省が札幌市において開催した「国際協力プロジェクト受託に関するセミナー」に、教職員23名が参加した。

大学の教育研究等の質の向上
 3 その他の目標
 (2) 附属病院に関する目標

中期目標	<ul style="list-style-type: none"> 教育、研究、診療のそれぞれの課題と役割を明確にしつつ、先端医療を実践する拠点を形成する。 医学部・歯学部への臨床医学教育、医学研究科・歯学研究科の学生に対する臨床研究を通して、全人的医療人の育成を目指す。また、本学の他研究科等や企業、官庁と連携し、高度先進医療の基盤となる研究や技術開発を促進し、その成果を日常の診療に還元する。一方で社会に開かれた病院とし、専門性の高い医療の実践、地域医療支援、市民への健康サービスを行う。これらの活動を実現するために、教育、研究、診療の各部署にそれぞれ専門性の高い優れた人材を配置するとともに、経営を効率化し、健全な病院経営を行う。
------	---

中期計画	年度計画	計画の進行状況等		
<p>良質な医療人養成の具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 医学研究科・医学部及び歯学研究科・歯学部との密接な連携の下に、卒前、卒後教育並びに生涯教育の実施体制を整備する。また、基礎研究を臨床医学に移転する臨床研究を主体的に展開する。 卒前、卒後教育に関しては、救急医療を含む実践教育を重視するだけでなく、全人的医療人の養成に努める。 医師・歯科医師の生涯教育並びに地域医療支援に資するため、最新の研究成果や医療情報の提供、技術指導、共同研究を行う。 	<p>良質な医療人養成の具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 医師の卒後臨床研修必修化に対応する卒後臨床研修センターの教育体制の整備・充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 医師卒後臨床研修プログラムに基づき、平成16年度はAコース（1年目北大病院、2年目学外病院）50名、Bコース（1年目学外病院、2年目北大病院）53名の研修医を採用した。各診療科に改善点を照会するとともに、北海道大学病院医師卒後臨床研修管理委員会を中心に協力病院と問題点・改善策を共有し、本プログラムを充実させた。また、「研修医の医療行為に関する基準」を策定し、公表した。 		
	<ul style="list-style-type: none"> 平成18年度から義務化された歯科医師の卒後臨床研修の体制と内容を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 卒後臨床研修センター歯科医師臨床研修専門委員会で卒後臨床研修について検討を開始するとともに、厚生労働省担当官による講演会等を実施した。同専門委員会においては、単独型臨床研修及び複合型臨床研修コースの歯科医師卒後臨床研修プログラムの方針を策定し、併せて複合型臨床研修コースにおける管理型臨床研修施設となった場合の協力型臨床研修施設の検討を開始した。平成17年度には歯科医師卒後臨床研修プログラムを策定・公表することとしている。 		
	<ul style="list-style-type: none"> 「地域医療連携部」を設置し、北海道内の地域医療機関、介護・福祉施設等との連携を強化し、患者サービスの向上に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 北大病院で入院医療を受けた患者や外来通院中の患者が、地域・北大病院の医療福祉資源を活用して質の高い在宅生活を確保できるよう支援するとともに、地域医療福祉機関とのネットワークを構築し、連携機能を円滑化することを目的として、平成16年4月に「地域医療連携部」を設置した。さらに、平成16年6月に地域医療連携部委員会の下に地域医療連携推進WGを設置し、地域医療連携機能の強化に関する具体的な方策を策定するとともに、同連携部の活動を積極的に公表するためにホームページを整備した。 		
	<ul style="list-style-type: none"> 北海道内の医療機関における勤務医・開業医に対し、講演会等により最新の医療技術等の指導・啓蒙を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 北海道医師会、北海道歯科医師会等と連携し、北海道内の医療機関の勤務医・開業医に対する講演会等を開催又は参画し（計302回）、延べ25,342名に医療技術等の指導・啓蒙を行った。 		
<ul style="list-style-type: none"> これらの活動並びに組織運営体制について、外部評価を受ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域医療支援のための「地域医療支援室」を設置し、医師紹介に係る窓口を一元化し、業務の透明化を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成16年4月に地域医療支援のために「北海道大学地域医療支援室」を設置し、平成16年6月から医師紹介業務を実施した。なお、平成16年度は3,907件の医師紹介要請があり、3,791件について医師を紹介した。 		
	<ul style="list-style-type: none"> 日本医療機能評価機構による審査を受けるための委員会を設置し、検討を開始する。 	<ul style="list-style-type: none"> 平成17年1月に病院長、副病院長、薬剤部長、看護部長、診療支援部長及び事務部長等を構成員とする病院長連絡会議を設置し、日本医療機能評価機構の審査を受けるための検討を開始した。また、第三者評価として、検査に特化した品質マネジメントシステムの国際規格であるISO 15189の取得を目指し、平成17年3月10日、11日に実地検査を受けた。結果は平成17年7月に判明する予定である。 		
<p>研究成果の診療への反映や先端医療の導入のための具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 遺伝子工学を用いた細胞治療、高度先進医療、探索医療（トランスレーショナル・リサーチ）及び治験研究を積極的に推進するための組織と施設の整備に努める。さらに、産学共同研究を推進し、研究成果の産業界への 	<p>研究成果の診療への反映や先端医療の導入のための具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> トランスレーショナル・リサーチとしての「遺伝子工学・細胞治療センター」を有する医・歯学総合メディカルセンター新営構想の再構築を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 病院長の下に設置した経営推進部門会議の第一次答申（6月18日）で、緊急の課題として、医歯学総合メディカルセンター構想の再検討が示され、法人化後における具体的に実現可能な実施方策について再検討した。その結果、7月1日開催の病院運営会議で「医・歯学総合メディカルセンター」新営構想の見直ししが了承され、経営の健全化を含めて検討を開始した。 		
	<ul style="list-style-type: none"> 遺伝子・細胞治療、再生医療、 	<ul style="list-style-type: none"> 平成8年から開始した遺伝子治療（アデノシンデアミナーゼ欠損症）を平 		

<p>移転を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 包括的な臨床試験や地域連携型の治験を推進し、新しい医療技術や機器の臨床応用を図る。 	<p>臓器移植医療等の高度先進医療の充実を積極的に推進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「臨床治験センター」を拡充・整備し、地域連携型の治験を進める。また、センターと外部の治験施設管理機関（SMO）との連携を図る。 	<p>成16年度も継続して実施した。 また、平成17年1月に放射線治療分野における高度先進医療「強度変調放射線治療」の申請を厚生労働省に対し行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> 外来診療棟の「治験管理センター」施設を拡充・整備するとともに、治験実施に伴うインセンティブ経費を配分すること等により契約件数の増加（平成15年度178件、平成16年度193件）を図った。 また、北海道大学病院と関連病院13施設とで、「北海道大学治験ネットワーク」を構築するとともに、SMO(治験施設管理機関)との情報交換を行った。 	
<p>医療サービスの向上や経営の効率化に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 医療提供体制の整備を行い、外来・病棟・中央診療部門の重点化、効率化を進める。 	<p>医療サービスの向上や経営の効率化に関する具体的方策</p> <ul style="list-style-type: none"> 「腫瘍内科」並びに「化学療法センター」を設置し、医療サービスの向上と病院経営の改善を図る。 医科・歯科の患者ID番号を一元管理し、患者情報を共有することにより医療サービスの向上を図る。 フィルムレス化を実施し、電子カルテの導入を検討する。 「ME機器管理センター」の設置を検討し、医療機器等の集中管理による経営の効率化に努める。 病院管理会計システムを運用して、部門ごとの業務内容、収支(原価計算)の分析に基づき、業務改善計画の策定・実行を検討する。 外来診療科の再配置を図り、臓器別診療の実現に向けて検討を開始する。 院内学級、ふれあいコンサート等に研修医・学部学生を参画させて、患者サービスを充実させる。 入院患者がパーソナルコンピュータや携帯電話等を使用できる環境の整備を検討する。 専任病院長が十分な任期を確保できるよう任期・再任方法等を検討する。 専任病院長がリーダーシップを発揮できる制度を検討する。 病院長の下に経営推進部門を設置し、病院経営の健全化に努める。 	<p>医療サービスの向上と病院の経営の改善を図るため、平成16年4月に専門診療科として「腫瘍内科」を設置、9月に中央診療施設として悪性腫瘍の抗腫瘍薬治療を行う「外来治療センター」を設置した。なお、同センターは、設置を計画していた化学療法センターについて、外来運営委員会における検討により、名称のみを変更したものであり、これらに併せて外来診療スペースの見直しを行った。また、平成17年1月には「歯科外来手術センター」を設置した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 同一患者が医科と歯科で2つの患者ID番号を持っていたが、平成16年8月から12月にかけて、それぞれの患者ID番号を名寄せして一元管理を行い、医科と歯科で患者情報を共有することにより、処方内容の確認など医療サービスの向上を図った。 医科は5月17日から、歯科は電子化されていないフィルム一部を除いて6月1日からレントゲンフィルムの画像取り込みによるフィルムレス化を実施した。 また、平成16年4月から統合医療情報システムの電子コメントを利用し、電子カルテ導入の試行を開始した。 平成16年9月に「ME機器管理センター準備委員会」を設置し検討を重ね、中央診療施設として、「ME機器管理センター」を設置することとし、医療機器の集中管理による経営の効率化を図ることとした。 病院管理会計全国共通システムに北海道大学病院独自の部門名称、コスト配分基準の設定等の入力作業を行った。さらに原価計算分析に必要なデータを取り込み、本稼働に向けての問題点の確認・整理、調整及び対応方法の検討を行った。 外来診療スペースの見直しにより、循環器外科外来を形成外科外来隣に、リハビリテーション科をリハビリテーション部に隣接して再配置するとともに、外来トリアージ室を整備した。 また、平成16年12月の病院運営会議において、「総合外来」診療スペースの見直しの具体案が了承され、平成17年3月に拡充・整備した。 院内学級の春・秋の遠征に医師、看護師、大学院学生及び事務職員が参加し、行事をサポートした。 また、患者サービス推進委員会主催でふれあいコンサート(「七夕の夕べ」8月4日、「クリスマスの夕べ」12月13日、「院内コンサート」2月4日)等を実施し、患者から好評を得た。これらの行事には研修医、学部学生を参画させるなど、スタッフの充実を図った。 平成16年9月から病棟9階及び12階に計4台のインターネット端末機を設置して入院患者が使用できることとし、患者サービスの向上を図った。 また、患者サービス推進委員会において携帯電話の使用について検討し、平成17年4月から使用方法・場所を特定し、解禁することとした。 専任病院長が十分な任期を確保できるよう、医学部長・歯学部長等により任期・再任方法等について検討が行われた。 3名の副病院長を置くとともに教育研修担当2名、研究・治験担当1名及び歯科担当1名の病院長補佐を置いた。さらに専任病院長がリーダーシップを発揮できるよう、病院長補佐等の増員も視野に入れて検討した。 平成16年6月に病院長の下に経営推進部門を設置し、病院経営情報の調査、収集及び分析を行うとともに、病院経営に関する緊急の課題について、改善に向けての具体的方策の企画・立案を行った。 	

<ul style="list-style-type: none"> 看護部、薬剤部及び中央診療部の合理的再編を進め、病院運営の改善、効率化を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 病院所属教員の診療業務に対する適正な評価を含め、北海道大学病院の自己点検評価システムを検討する。 診療支援部等の人材の効率的配置を行い、病院運営の改善、効率化を推進する。 	<p>同部門から病院長に対して、第一次答申（6月18日）で4項目、第二次答申（7月27日）で7項目の答申書が提出され、その答申に基づいて、ME機器管理センターの設置の準備、病床稼働率の向上のための取組等を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> 国立大学附属病院長会議の病院評価問題小委員会校として、法人化後の国立大学附属病院における自己点検評価のガイドラインを取りまとめた「国立大学附属病院の評価について」の作成に参画し、また、同報告に基づき、本院の自己点検評価システムを検討した。 薬剤師の配置を見直し、平成16年4月から歯科調剤室の正規職員を医科調剤室へ、医科調剤室の非正規職員を歯科調剤室へと配置替えした。また、平成16年10月から歯科調剤室の薬剤師が半日、医科調剤室の応援をすることとした。 医科と歯科の病院統合により、平成16年4月から歯科診療センターでは、それまで外注していた検査を院内で実施することとし、経費節減を図った。
<p>適切な医療従事者等の配置に関する具体的方策等</p> <ul style="list-style-type: none"> 重点化した診療体制において必要な人員配置に努める。また、職員の知識・技術の向上を目的とした研修の受講機会を確保し、職務能力の向上を図る。 	<p>適切な医療従事者等の配置に関する具体的方策等</p> <ul style="list-style-type: none"> 看護部、薬剤部、診療支援部等の組織運営体制を整備し、適正な人員配置を検討する。 各部署からのローテーションによる職員研修を行い、安全管理業務等を体験させることで、職員個々の意識高揚を図る。 医療安全対策及び感染対策等に関する研修による高度な資格（感染管理認定看護師、救急看護認定看護師、ホスピスケア認定看護師等）の取得のための受講機会の確保に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 看護部においては、平成16年7月からNICU(新生児集中治療室)を3床から6床に増加したことに伴い、看護要員の配置を行った。また、看護助手の定年後は、看護師を採用して配置を調整し、遅出勤務を加える等勤務の工夫を行い、4病棟において上位の夜間看護加算(20:1から15:1)を取得した。 薬剤部においては、院外処方箋発行率を平成15年度平均70.5%から平成16年度平均90.8%に高め、これにより、TPN(静脈栄養剤)・外来抗がん剤及び入院抗がん剤のミキシング業務の保険請求件数について、平成15年度の644件から平成16年度は1,079件(3月比)まで拡充した。また、服薬指導の保険請求点数も平成15年度の167,050点から平成16年度は217,000点(2月比)へと拡充した。 なお、服薬指導業務についてさらに合理化、効率化を図るため、平成17年1月から服薬指導に従事しているスタッフの勤務場所を一室にまとめた。 医療安全管理を推進するために研修医に対する医療安全研修を4月、7月、2月の3回実施した。 また、採用等により新たに診療を開始する医師を対象に異動後の医師研修(4回)、院内の救命医療体制整備のためにBLS/AED救命講習会(8回)、医療機器シリーズ研修(2回)及びその他の研修(10回)を実施した。 認定看護師資格者の育成を計画的に実施することとし、平成16年度は手術看護認定コースが開始されたことから、手術部副看護師長に手術看護認定看護師養成研修を受講させた。 北海道大学病院医療企画課・医療支援課所属職員、医療職基本給表(A)適用職員、看護部所属職員、救急部・集中治療部・新生児集中治療室所属教員及び医員に変形労働時間制を導入した。
<ul style="list-style-type: none"> 外部から研究支援者、技術者を積極的に受け入れるとともに、優秀な看護師、技師、事務職員を確保するために、職員の勤務環境の整備に配慮する。 	<ul style="list-style-type: none"> 業務の効率化を図るため、幅広い職種について変形労働時間制の導入の拡大を検討する。 	

大学の教育研究等の質の向上に関する特記事項

1. 大学院整備の展開

この中期目標期間において、大学院の整備は本学の重点項目の一つとなっている。法人化初年度の平成16年度に本学は大学院整備に関して新しい一歩を踏み出した。3つの専門職大学院の設立ないし設立準備、1つの新領域研究科の設立、そして2つの学院・研究院構想による改組の準備である。

本学は基本理念の一つとして「実学の重視」を掲げているが、高度専門職業人教育を目的とする大学院教育の整備は、この基本理念にかなうものといえる。平成16年度には法科大学院（法学研究科法律実務専攻）を開設し、あわせて、法学研究科・経済学研究科・工学研究科の緊密な連携による「文理融合」を特色とした公共政策大学院（公共政策学教育部、公共政策学連携研究部）並びに経済学研究科の再編による「情報」「ファイナンス」を「会計」に結合するユニークな会計専門職大学院（経済学研究科会計情報専攻）の設置準備を行い、両者ともに平成17年度に開設できることとなった。また、新領域の研究教育を目指す研究科として、平成16年度に情報科学研究科を開設し、これと同時に工学研究科の再編を進め、平成17年度から改組することになった。

2. 学院・研究院構想の実現

本学はこれまで、学生の所属する教育組織と教員の所属する研究組織を分離する「学院・研究院構想」を検討してきたが、平成16年度における準備を経て、環境科学院・地球環境科学研究院と水産科学院・水産科学研究院を平成17年度に設置することになった。

「学院・研究院構想」は、大学の教育・研究組織を学問的、社会的要請に対応して柔軟に再編しうる体制を目指すものといえる。大学は、長い歴史の中で培われてきた知の伝統を継承し、発展させるといふ使命を担ってきたが、同時に自ら新しい研究領域を開拓し、その分野での専門家を機動的に養成するという使命も果たしてきた。大学は、その両面の調和を図りつつ、自己の変革を求められてきたともいえる。しかし、旧来の大学院の研究科は教育と研究を一体的に行う組織とされているため、その改組再編には大きな困難がともなう。大学における教育と研究のそれぞれに求められる学問的、社会的要請はきわめて多様であり、それに単一の組織で対応することには無理なところがあった。また大学院重点化以後も、本学は「全人教育」という理念のもとで、全学支援体制による独自の教養教育（全学教育）を展開し、それを専門教育と連携させる学部教育体制の充実にも努力してきた。大学院の再編は、常に学部教育の展開を考慮に入れるものでなくてはならない。

このような大学に課された多面的な要請に応えるべく、本学は、学校教育法第66条の規定を活用し、研究上の観点から教員の所属する研究組織（研究院）を編成し、教育上の観点から学生の所属組織である教育組織（学院）を編成することを可能とする「学院・研究院構想」を採用することにし、その第一歩として上述の改組を行った。なお、この構想に沿った組織改編は、生命科学の分野でも検討しており、その他の領域においても検討の上、可能なものから逐次実施する予定である。

3. 全学教育を中心とした学士課程教育の改革

本学の全学教育は、学部一貫教育体制による学士課程教育の中で、すべての専門教育にとって不可欠であるという意味で「コモン・コアカリキュラム」と位置付けたりベラルアーツを中心とする「教養科目」と、各学部の専門教育の基礎となる「基礎科目」から構成され、全国の大学に先駆けて、本学の全教員がこれに責任を負う全学協力体制によって実施されている。

平成16年度には、教養教育のコアカリキュラムの実績を、新高等学校学習指導要領（平成11年告示）による高校教育の変化に対応する、平成18年度以降の基礎教育・外国語教育を中心とする教育課程改革に継承するため、新設の総長室・教育改革室の主導の下、各部署の意見をまとめて広範な検討を行い、新教育課程の基本的方向を確定し、実行教育課程表の策定に向けて具体化の準備を始めるとともに、「秀」評価及びGPA制度の導入を中心とする成績評価の改革を平成17年度から先導的に実施することを決定した。

(1) 平成18年度以降の新教育課程の基本的方向の決定

新高等学校学習指導要領においては、学習内容が従来に比べて大幅に削減され、その影

響は、特に数学・理科において、大学教育にも大きく及ぶと予想される。その対応策の検討のため、平成15年度の教務委員会に設置された「教育戦略推進WG・平成18年度以降の教育課程専門部会」が平成16年4月に提出した中間報告を承けて、平成16年度には教育改革室の下に「平成18年度以降の教育課程検討WG」を設置し、新学習指導要領の影響を「学生の学力の多様化」ととらえ、コアカリキュラムを含めた本学の学士課程教育全体について改革の検討を行った。その結果、平成16年12月に「平成18年度以降の教育課程について（最終報告）」をまとめ、平成18年度以降の全学教育と専門教育にわたる教育課程改革の基本的方向を明らかにした。それに基づく科目別の主な改革点は以下のとおりである。

コアカリキュラムの運用状況の点検・改善

文系基礎科目の新設

理系基礎科目の再編：(1) 入門科目の新設；(2) 理科の専門系コースと準専門系コースの設定；(3) 数学の科目の再編；(4) 互換性科目の新設

基礎実験科目の再編：コアカリキュラムと一体化した総合自然科学実験の新設

現行の外国語科目の2種類の科目（外国語科目及び外国語演習）への再編

情報科目の再編：情報学Ⅰ・Ⅱの新設

第1年次における履修登録単位数の上限設定の検討開始

その後、「最終報告」を具体化するため、平成17年1月に教育改革室の下に以下の4つのWGを設置し、各科目の内容等の検討を始めた。これらのWGの結論は、平成17年夏までに作成する実行教育課程表に反映させるとともに、互換性科目等、学部専門科目の教育課程の改革にも反映される予定である。

GPA・上限設定・成績評価実施検討WG

自然科学実験テーマ検討WG

文系基礎科目検討WG

互換性科目・理系基礎科目・入門科目検討WG

(2) 「秀」評価及びGPA制度の実施

「秀」評価及びGPA（Grade Point Average）制度の実施については、教育改革室に設置した「『秀』評価及びGPA制度実施検討WG」で検討を重ね、その報告が平成16年12月に教務委員会において審議・了承された。本制度を導入し、学生個々のGPAを大学並びに各学部で把握し、それを学生本人及び指導教員に通知することは、学生の学習意欲を喚起する上で有効であり、かつ、これを大学院進学や卒業資格に反映させることは、社会に対して大学の教育の質を保証するという意味において、大学の責務であると考えられる。

現行の「優」「良」「可」「不可」の4段階に「秀」を加えた5段階評価に基づくGPA制度は、平成17年4月の学部新入生から実施し、平成17年度は試行利用、平成18年度以降に本格利用とし、平成16年12月に「『秀』評価及びGPA制度の実施について（報告）」を全学に公表した。その後「GPA・上限設定・成績評価実施検討WG」でその実施細目についてさらに検討を重ね、質疑応答形式の解説「『秀』評価及びGPA制度の実施について（Q&A）」を作成し、全学に周知徹底した。

4. 教育改善・教育改革を目的とした教育プロジェクトの展開

平成16年度に文部科学省が公募した各種教育プログラムに対して、教育改革室が中心となって、企画・立案・学内選定を実施して応募した結果、下記の取組が採択された。また、これと並行して、総長主導の重点配分経費を活用して、教育の質の向上を目指した全学の教育改革促進事業を展開した。このような新しい体制によって、全学的な教育改革とともに、各部署における教育改革や部局の枠を越えた横断的な教育改革の取組を促進することができた。

(1) 文部科学省による公募プログラム

文部科学省による公募プログラムで採択された本学の取組は次のとおりである。

大学教育の改善に資する取組（特色GP）：「国際獣医学教育協力推進プログラム - アジア・アフリカ諸国を視野において - 」

また、8大学（北大、東北大、東大、東工大、名大、京大、阪大、九大）で構成す

工学教育プログラム基準強化委員会幹事校の東工大から共同の取組として応募した「コアリッションによる工学教育の相乗的改革」も採択された。各種審議会からの提言等、社会的要請の強い政策課題に対応したテーマで公募が行われた取組（現代GP）：「北方地域人間環境科学教育プログラム-総合的環境科学教育による地域活性化-」、「大学院・社会人教育支援e-カリキュラム」の2件。法科大学院における実践的な教育の推進を目的に公募が行われた取組（法科大学院等形成支援プログラム）：「データベース利用総合電子教育システム」。

(2) 学内で公募した事業

全学教育、学部専門教育、大学院教育及び学生支援など、教育環境の改善・整備のため、重点配分経費を活用して、教育改革室が以下の教育プロジェクトを学内公募し、選考・採択した。

全学教育プログラム開発研究、全学的視点からの教育プログラムの開発

23件の申請のうち20件を採択（配分予算：13,820千円）

教育プログラム開発研究及び教育改革の試行

13件の申請のうち8件を採択（配分予算：5,700千円）

5. 入学者選抜制度改革

大学と社会の変化に対応した本学の入学者選抜制度改革を、組織、制度、アドミッション・ポリシー等の諸側面から下記のように展開した。

(1) 入学者選抜の現状と今後の対応に関する検討

「新高等学校学習指導要領」に基づく教育を受けた高校生を選抜する平成18年度以降の入学者選抜制度については、他大学に先駆けて、平成15年12月に基本方針を外部に公表しているが、平成16年度では、教育改革室の下に「入学者選抜の現状と今後の対応に関するタスク・フォース」を設置し、以下の課題を遂行した。

平成18年度以降の入学者選抜制度に関して、本学の教育理念・求める学生像・募集単位と選抜方法の意図（前後期、AO入試の別、学部ごとの特色などを含めて）などからなる包括的なアドミッション・ポリシーを他大学に先駆けて作成し、平成16年12月に公表した。また、これに合わせて、平成18年度からAO型入試を導入する帰国子女特別選抜、新たに大学入試センター試験を課すAO入試（農学部、工学部の一部学科）、理学部・工学部の募集単位の変更なども策定し、入学者選抜委員会の議を経て公表した。

平成7年度入試から10年間の入学者選抜に生じた傾向等について、役員会、部局長等連絡会議等に報告し、今後本学が取り組むべき課題と論点を整理し、(1)企画・広報・調査・実施を統括する一元的な入学者選抜組織確立の検討を提起し、(2)平成20年度以降の学生募集単位の「大きくくり」に関するアンケート調査を高校生・父兄・高校教員・在学生に対して実施し、「募集形態に関する基本調査報告書」を取りまとめ、法人化前の教務委員会の下に設置されていた「教育戦略推進WG 学生編成専門部会」から平成16年3月に提出された「平成19年度以降の学生編成について」を受けての平成20年度以降の学生編成と募集単位改革検討の基礎を整え、(3)法人化後の入試広報の抜本的改革を行う必要性を明らかにし、これらの課題に対応するWGを教育改革室の下に設置する準備を行った。

(2) 新たな「アドミッション・センター」の設置準備

上記「タスク・フォース」の提案に基づき、教育改革室の下に「入学者選抜組織一元化WG」を設置（平成16年6月）して検討した結果、現行のアドミッション・センターを廃止して、入学者選抜に係る企画・広報・調査・実施の4部門からなる新組織を設置するべきであるとする報告書が提出（平成16年7月）された。この内容は教育改革室、入学者選抜委員会、教育研究評議会、役員会での議論・了承を経て、新たな「アドミッション・センター」を平成17年4月に設置することに至った。これによって今後、総長の主導の下に、入学者選抜制度改革を機動的・戦略的に実施することを可能とした。

(3) 「広報・相談部門」の活動基盤の整備

前項に加えて、上記「タスク・フォース」による問題提起を受け、教育改革室の下に「入試広報改善プロジェクト推進WG」を設置（平成16年10月）し、さらに学内外者からなるアドバイザー・ボード（学外からは高校教員、電通、JTBなどが参加）を置いて、広報コンテンツと広報方法の両側面にわたって検討を行った。その結果、本学の特色を改めて明らかにし、それを統合したプログラムで高校生や一般社会に広報するプロジェクトの

立ち上げ準備を行い、新たに設置する「アドミッション・センター」の「広報・相談部門」の活動基盤を整えることができた。

6. キャリアセンター設置と全学的なキャリア支援の展開

大学教育を学士課程教育のみならず、入学者選抜（入口）から就職・進学（出口）までの過程としてとらえ、総長の主導によって、平成16年4月に「北海道大学キャリアセンター」を設置して、キャリア支援・教育を開始した。キャリアセンターの多くの活動は、次の2つのカテゴリーに分けられる。

(1) 学生の就職活動支援

学生の就職活動支援のために、ホームページなどによる就職情報の提供や広報誌「キャリア通信」による啓発活動を行った。また、国家公務員種ガイダンス、学生の要望に基づく地方公務員及び技術職についての公務員ガイダンス、本学OBによる教員志望者ガイダンス、自己分析セミナーや適性、マナーについてのセミナー等（36回、延べ3,881名参加）を開催するとともに、企業等の説明会（69回、延べ14,278名参加、延べ416社参加）を開催し、学生の就職活動を組織的・主体的に支援した。また、平成16年7月には各研究科・学部の連絡及び広報の窓口となる教員及び事務職員で構成する「キャリア支援・教育連絡会議」を発足させ、各研究科・学部における就職支援活動やインターンシップなどを集約・調整し、キャリアセンターを中心に就職支援活動やキャリア教育を効率的・組織的に行う全学的体制を構築した。

(2) キャリア教育の研究活動

平成16年9月に、高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部とキャリアセンターが協力して「キャリア教育に関する研究会」を立ち上げ、両センターのみならず、国際広報メディア研究科、情報科学研究科等、複数の研究科所属教員の参画を得た。同研究会においては、本学におけるキャリア教育の在り方を研究するとともに、全学教育におけるキャリア教育科目の設定についても研究し、平成16年度から開講した「インターンシップ」科目に加えて、平成17年度からキャリア教育科目「キャリアデザイン」を開講することとし、その準備を行った。

7. 専門職大学院の特色ある入試方法と入学金・授業料免除措置の実現

平成16年4月に開設した法科大学院に加えて、複数の研究科や専攻の協力によって、平成17年4月から設置することとなった専門職大学院においては、それらの特色に合致した入学試験を実施するとともに、アドミッション・ポリシーの「求める学生像」に適合する学生の積極的受入れを、総長決定枠としての経済的援助措置（入学金・授業料免除）によって推進した。それらは次のとおりである。

「文理融合」を特色とする公共政策大学院の設置準備を行い、平成17年4月の設置が認められ、入学試験を実施した。そこでは議員、公務員、NPO・NGO職員などの社会経歴を積極的に評価し、その経歴を大学院教育と結合する道を開いた。この結果、大学卒業後以外の資格審査を経た者5名（内、高校卒3名）を含む15名が社会人特別選抜を通じて合格した。

「情報」「ファイナンス」を「会計」に結合するユニークな会計専門職大学院を経済学研究科の再編によって実現し、特別選抜試験を行うなど、その特色に応じた入学試験を実施した。

法科大学院を含めて、これら専門職大学院については、平成16年8月に教育改革室の下に設置した「授業料等免除の取り扱いにかかる検討WG」の検討結果（平成16年11月に報告書提出）に基づいて、入学試験の成績が優秀と認められた者について、定員の上位10%を総長決定枠として、初年次に限って予算措置を行うことを決定した。これにより、法科大学院10名、公共政策大学院合格者3名及び会計専門職大学院合格者2名が入学科・授業料免除の措置を受けられることとなった。

8. 研究支援体制の確立と効果

本学の研究支援は総長室の一つである研究戦略室によって企画・立案され、実行に移されている。その中で、以下の3点は特筆すべき効果をもたらしている。

(1) 21世紀COEプログラムの支援

本学では、21世紀COEプログラムの組織的推進のために平成14年7月から「21世紀COE推進会議」（以下「COE推進会議」という。構成員は、総長、理事、研究戦略

室役員補佐、拠点リーダー、当該研究科長）を設置している。平成16年度からは研究戦略室がその中核となって、プログラムの申請、採択プログラムの実施・運営・点検等に積極的に関与している。本学では平成15年度までに10件の21世紀COEプログラムが採択されているが、平成16年度は「革新的な学術分野」で「トポロジー理工学の創成」と「海洋生命統御による食糧生産の革新」の2件が採択され、合計12件となった。これは全国の大学の中で第6位となっている。

21世紀COE応募に際しては、「COE推進会議」が学内の支援体制整備を含めて厳正な学内審査を行い、本学として申請するプログラムを決定するとともに、申請後も、ヒアリングに残ったプログラムの学内リハーサルを実施するなどしている。

また、「COE推進会議」は各拠点の運営についても支援している。それぞれの拠点における適切な運営に加えて、進捗状況報告書（中間評価用）の作成とヒアリングのための学内リハーサルなどを実施した。その結果、平成16年度に実施された平成14年度採択の4拠点の中間評価では、1拠点がA評価、3拠点がB評価という成果を得た。

さらに、研究戦略室は「21世紀COEプログラム拠点活動報告会」等を開催し、その成果の社会還元にも努めている。平成17年1月には東京で、「北大が世界を拓く 知の融合と活用」を開催し、本学の将来構想及び平成15年度に採択された6拠点の拠点形成の目的、必要性、重要性及び活動状況について報告し、産学官関係者並びに一般市民等約400人の参加を得た。

(2) 包括連携と地域連携の推進

本学は、平成15年度の文部科学省科学技術振興調整費戦略的研究拠点育成プログラムに、創成科学研究機構を育成機関とする「北大リサーチ&ビジネスパーク構想」を提案し、採択された。この提案のメイン・コンセプトは、「知の創造」（ニューサイエンスの創成）と「知の活用」（創成されたニューサイエンスの社会還元）である。研究戦略室室長は創成科学研究機構の機構長として、提案構想の実現を先導してきた。

「知の活用」には、包括連携と地域連携という2つの道筋を設定した。包括連携は基幹総合大学として国内産業の基盤を強化するための、研究開発に優れた企業との連携である。包括連携に参加する企業には、「知の創造」段階から参加してもらい、協力しあってビジネスモデルを作成し、そのモデルを基にパテントマップを作り、共同で知的財産権を保有する。この知的財産権をベースに、本学は新産業の創成に貢献する。既に、学内に知的財産本部を設置しており、研究戦略室室長が本部長を務めている。

本学の包括連携は、研究交流・人材交流・人材育成を三本柱としており、この三本柱は提携企業から高く評価されている。これまで既に8社（日立製作所、三菱重工、富士電機ホールディングス、産業技術総合研究所、物質・材料研究機構、電通北海道、日本政策投資銀行、UFJキャピタル）と包括連携を締結しており、平成16年度末現在、5社と連携計画が進行中である。

一方、地域連携は北海道にある大学としての本学の社会貢献を目的としている。本学の「北キャンパス」に隣接する各研究機関が中心となって、各機関が持つ、従来の大学には無い機能をフルに活用することで、大学の創出した「知」を地域社会に還元する仕組みである。この仕組みを円滑に実施していくためには、道内主要機関が堅固な連携体制を構築することが重要であることから、平成16年7月に、道内の5機関（本学、北海道、札幌市、北海道経済連合会、北海道経済産業局）が地域連携協定を締結し、人材交流や人材育成などを一体となって実施することとした。

(3) 重点配分経費による研究支援

本学は平成16年度に総長主導による約12億3600万円の重点配分経費を使用した。研究戦略室においては、本学の研究を強く活性化するため、重点配分経費のうち約3億2千万円を学内公募等により活用した。公募事項は、「世界的レベルの戦略的プロジェクト研究の推進」（応募25件、採択5件）と「先端的融合学問領域創成のための支援」（応募32件、採択4件）であり、研究戦略室でヒアリングを含めた選考を行った。選考結果はコメントを付して応募者に通知し、今後の研究の展開の参考に供した。事後評価も厳正に行うこととし、特に、大型研究費への申請を前提に採択された「先端的融合学問領域創成のための支援」の提案については、平成17年度の大型研究費への応募状況を調査した。その結果、この支援が文部科学省の大型科研費等への応募につながっていることを確認した。

9. 国際交流の展開

平成16年度、総長室の一つである国際交流室が中核的役割を担って、本学の国際交流の

全学的展開及び全学的環境整備を図るとともに、戦略企画・実施体制を整え、この体制の下に下記を展開した。

(1) 東アジア、なかでも中国・台湾に向けての活動拡大

中国並びに台湾で基幹大学2校の協定締結を年度当初は計画していたが、北東アジア戦略の積極的展開により、復旦大学、吉林大学、国立台湾大学の3校を達成、加えて実際の学生交流が始まるまでに至った。

(2) 海外への派遣学生増加に向けた環境整備

平成16年度には、留学説明会をこれまでの年2回開催から5回に増やし、また、ホームページを充実し、留学情報提供掲示板を学内5か所に置くなど、留学生派遣についての情報環境の大幅な整備拡大を図った。その成果として、平成17年度派遣予定者（平成16年度選抜）は前年度の18人から33人に大きく増加した。

(3) 受入留学生のための措置

ソウル大学、浙江大学、吉林大学からの派遣留学生に奨学金を授与する措置を平成16年度から開始した。

(4) 国際開発協力の組織的推進

平成16年度当初は、国際開発協力プロジェクト参画に関連する情報環境の改善と、参画に対する国際交流室による支援拡大を計画していたが、その後の積極的な交渉により、「JICAとの連携協力協定を平成17年4月に締結することとなり、その準備を終えた。

平成16年11月に中国西安で行われたJBIICのワークショップに参加し、北大を広報し、あわせてJBIIC関連プログラムへの関与の深化を図った。その結果、JBIICを通じた円借款による中国内陸部人材育成事業による研修生を大学として組織的に受け入れ始めた。

これまで、国際的な社会貢献として、「JICAとの連携のもとに活動を行ってきたが、新たに、平成16年度にJBIICが公示した提案型調査にも本学として取り組み、「『環境技術と環境政策』に係る特設研修コース開発」及び「中国遼寧省における『水資源』事業調査」の2件を提案した。

(5) 海外広報活動の充実

本学の教育研究活動を積極的に海外に情報発信するとともに、海外からの来訪者や留学生との密なコミュニケーションを図るため、新たに英語版「ニューズレター」（季刊）を刊行した。また、平成16年度の学士院賞を受賞し、国際的にも著名な鈴木章名誉教授の英文の研究業績集「Organoboranes in Organic Syntheses」を作成し、広く配付した。

10. 病院における整備と充実

本学病院では平成16年度においては、特に次の項目で整備・充実が進んだ。

(1) 卒後研修内容の充実

医師の卒後研修必修化に伴い、本院で協力病院と連携して臨床プログラムを策定した。

また、その教育内容を充実すべく、平成16年度は研修医の医療行為基準を策定した。

(2) 地域医療体制の充実

北海道内の地域医療機関、介護・福祉施設との連携を強化するため、「地域医療連携部」を設置し、利用案内の配布並びにホームページの充実を実現した。さらに、「北海道大学地域医療支援室」を設置し、医師紹介に係る窓口を一本化した。「北海道地域医療協議会」に参画し、地域医療の充実に努めている一方、北海道医師会、北海道歯科医師会と連携して講演会を開催又は参画し、最新の医療技術等の指導にも努めている。

(3) 患者へのサービス向上

内科、外来の初診患者を診療する「総合外来」を拡充し、整備した。また、循環器外科、形成外科及びリハビリテーション科の再配置を行うとともに臓器別診療の実現に向けて検討を開始した。また、入院児童や入院患者のための院内学級や四季の催しの充実、インターネット端末機の設置等を行った。

11. 同窓会組織の整備と拡大

平成16年4月に15の学部同窓会と23の地区同窓会を束ねる北海道大学連合同窓会が結成された。同連合同窓会を窓口として、各同窓会と連携した事業（21世紀COEプログラム拠点活動報告会、北海道大学企業等研究セミナー、北海道大学カードの加入要請、同窓生名簿のデータベース化、ポプラ並木再生支援金の協力要請等）を積極的に推進した。